

「失われた」発話を見いだす [そのⅡ 恋するスワン]

上 西 妙 子

Summary

Retrouver des paroles perdues [II Swann amoureux]

UENISHI Taeko

Swann tombe amoureux d'Odette qui n'était pourtant son genre de femme. Jusque-là, jouissant, dans la compagnie de femmes de plus en plus grossières, de la séduction d'oeuvres de plus en plus raffinées, Swann vivait un disparate bizarre reposant sur son amour-propre sceptique et sarcastique. Swann amoureux à l'âge mûr, coeur étonné et passif, réussit au début à jouir de l'arbitrarité romanesque de leur amour selon son scénario écrit pour les deux.

L'amour de Swann se comprend comme la superposition de l'élasticité du langage qui s'accomplit sur la fonction de l'inclusion et de la contiguïté. Ainsi plus tard, Swann jaloux d'Odette, se bat contre le procès devenu autonome de la signification du signe Odette. Il la soupçonne d'infidélité et cette douleur-là, la pensée, rien qu'en se la rappelant, la recrée.

Comme l'argent incarne son équivalent=chose suivant le désir de celui qui le possède, en contrepartie de la «réalité introuvable», on n'obtient que «quelques mensonges, faibles indices de la vérité». Ainsi Swann peut-il se dire d'Odette qu'elle est sa femme entretenue par l'argent qu'il lui envoie. Il y profite du langage dans sa fonction de généralisation, de particularisation et de substantialisation.

L'amour de Swann se ferme sur un cri: «Dire que j'ai gâché des années de ma vie, (...) que j'ai eu mon plus grand amour!» Ce cri s'exprime par une paire d'antonymes fonctionnant de façon similaire dans une seule causalité, comme c'est le cas pour la jalousie dont le remède est la confirmation de ce dont on a peur. L'unicité de la vie et de la mort y disparaissent. Cela mène le Narrateur à voir chez Swann des «erreurs charmantes» qui se déroulent dans une circulation emboîtée de métamorphoses.

En présence de ces réalités opaques, insaisissables, nous nous sentons parfois pris dans l'errance erronée, perçue comme «recherche». Le romanesque dont la fonction est à la fois mystique et saugrenue que Swann amoureux a dûment rêvé et mal vécu autour de l'irréel d'Odette représente l'idée sur la base de laquelle sont vus les personnages de la *Recherche*, chacun à la recherche de ses erreurs charmantes.

序

たとえ一者においても併存する多様な価値観への身のあずけかたを表わすのに、私たちは、凌駕、包含、衝突といった、動的な物理的・空間的イメージを用いる。こういった表現は、それが量と質が関わる意志的な戦いでもあれば、頑なに動じようとしなない情念、そして惰性の傾きへの逃避でもあることを端的に捉えている。こういった様々な動きを包むく自分であるということ>は、どのような表現形態をとるのだろうか。本稿は、ブルーストの『失われた時を求めて』中の主要人物であるスワンが、他者との関わりにおける自己理解、表現において、迂回しながらも自らに向かい合う姿がどのように描かれているのかを考察する。そこでは、メトニミー（ x は y の部分である）とシネクドック（ x は y の一種である）¹⁾を、広義に捉えた鍵概念として用いることになる。

①人生とゲームと<知>

「スワンの恋」は、『失われた時を求めて』全7篇中の第1篇第2部のタイトルである。スワンはオデットに恋をする。このスワンの感情は、「非常に特殊な恋情（I, 246）」とされる。高級娼婦であったオデットに、スワンは出会う。初対面において彼が彼女に見たものは、「美しくないとは言えないが、スワンには訴えない美しさ、欲情をそそるどころか、かえって一種の肉体的嫌悪感さえ起こさせるような美しさ、人によって様々であるが、その感覚が求めるのとは反対のタイプの女性の美しさ（I, 193）」という、むしろ否定的な美しさであったが、やがて知性とセンスで勝るとされる彼²⁾が、このオデットに恋をする。

二人の関係の始まりには、距離があるゆえの誘惑が作用する媚態の2元的立場³⁾が、確かに見られる。その場合、誘惑を感じるスワンの心の流れは、ディエゲーシス⁴⁾で描かれる。

彼が彼女に訪問を許したその帰りぎわに、なかに入れていただいてとても嬉しかったこのお宅に、ほんの少ししかいられなかったのは心残りですと、彼のことを彼女にとってはまるで、彼女の知り合いの人たち以上のものであるような口振りで語り、一種の小説的な連結線を二人の間に引こうとしているように思われ、それは彼の微笑をさそったのだった。

（I, 193）

一方でスワンは、恋の対象のオデットを理解しようとして、そこから彼女が現れてくる彼女の世界の構造の把握に執着し、食違いを浮き彫りにする二人の言い合いが、恋の進行と平行してミメシス⁵⁾で示される。たとえば、オデットの女性関係をも疑うスワンは、「そのことならもうあなたに話したわ。分っているくせに」というオデットに、彼が望むように語らせようとし、それに対してオデットは、彼の意図を読み取ってそれを軸にして応えようとする。

「それは分っているよ、でも確かなのかな？『分っているくせに』なんて言わないで、『私はどんな女の人ともそんなことはしていません』と言ってほしいんだ。」(…)

「まあ、なんてあなたは私を不幸にするんでしょう」と彼女は、彼の問い詰めの包囲から身をひらりととはぐらかすと叫んだ。「もういいんでしょう？今日はどうしたっていうの？私があなたを嫌って、厭になるようにしようと決心したっていうことなの？(…)」

「私があなただけのことを悪く思うなんてことがないと思ったら、たいへんな間違いだよ」とスワンはオデットに、納得させようとするわざとらしい優しさをこめて言った。「私はあなたに、私が知っていることしか話さない。それでいつだって、そこで話すこと以上を私は知っているんだ。(…) 私はただ、それがあなたを私が知ってからのことかどうかを知りたかったんだ。だって、それはごく当然のことだろう？(…)」[「だってわからないのよ、私は。プーローニュの森だったと思うのだけど。(…) そのひと私にこう言ったわ、『小さい岩のうしろに行って、水面に月がきれいに映っているのを見てくださいよ』。私はまずあくびをしてから答えたの、『だめよ、私疲れてるの、ここのほうがいいわ。』」(…)]

オデットはこれだけを物語るのに、それが彼女にはごく自然に思われたためか、それとも事の重大さがそうしてやわらげられると考えたためか、または恥じ入ったという素振りを見せないためか、微笑みさえ浮かべていた。そして、スワンの顔を眺めながら、彼女は声の調子を変えて言った、「気の毒な方ね、あなたは。私を苦しめて、私に嘘をつかせて喜んでいるなんて、私、ほうっておいて欲しいから嘘をいうのよ。」(I, 356-60)

全体的なく生>としての<私>は、他者の持つパースペクティウにおいてしか完結せず、また、そこに見られる完結性は、<私>が無抵抗であることに依りかかっている。話しあいによって関係の事実を定めようとするスワンは、「話す人間は、己れの自意識の演出家として姿を現し、そのためにいつも偽物という疑いをかけられることになる⁶⁾」ということを忘れている。スワンの得心は、先送りされるものでしかない。スワンにおいて抱懷された彼女との関わりの形が、前出のディエゲシスで表される快い物語とすると、ミメシスで示された上記の対話は、スワンが切迫して問うという妥当性を主張する演出性と、それがオデットの二重の演出を引き出すという不幸しか招かない。二人の関わりを語るディエゲシスとミメシスが示す対照とは、前者における、主題化されてできあがる、そこに沸き上がる感情にすでに浸された主観的な恋愛の進行と、後者の、問いに答えるというよりも、聞き手が話し手において感じ取った意図と相関させてくり出す発話の閉鎖性・限定性である。

二人の食い違いで問われるべき内容とされるのは、まず、ごく伝統的な能力の基準とみなされている<判断する力としての知性>である。たとえば、ヴェルデュランのサロンでの会話において、スワンが出入りを認められているところの、より高い社交界が話題に持ち出されたとき、そういうところには招かれない屈辱を感じている彼らの取り巻きは、スワンの判断を求めて言う。「すべては、あなたが知性 (intelligence) をどう考えているにかかっています。あ

あなたの考える知性とは？」そこにオデットが口をはさむ。「そう、それよ。私に説明してちょうだいと頼んでも、どうしても言ってくれないけれど、それが大問題よ (I, 256)」。スワンを問い詰める彼らは、メンバー間の相互凝集力によって成立する社交的グループへの参加も、知性の領域にあるとする。しかし当然ながら、彼らの意図は、彼らには手に入れない俗世間的価値を知的に否定することである。

しかしスワンは答えない。そして彼が答えない説明をプルーストもせず、ただオデットの怒りの反応が示される。「もちろん、わたしに対しても、この調子ですわ。(…)相手にできないと思われているのが、私だけではないとわかって、わたし腹をたてはしませんけれど (I, 257)」。しかしスワンは単に「相手にできない」と思っているのではないだろう。そこに関わっているのは、感性、知性の機能、そしてそれらの使用法が関わる好みや趣味の問題でもあれば、知的に方法化されないままに作用や反応をする、ある種の統一的な感性、いわば、世界の見通し方に馴染む己れの自意識の演出法なのだ。その総体は、思わぬ深度で<人>に食いこんでおり、日々のあり方を構成している。趣味の一般的な定義は、「美的体験のなかで与えられた感覚的印象を反省的に賞味しつつ、対象の微妙な差異を見分ける能力⁷⁾」とできるが、そこに指摘される「反省的な自己享受の契機」を考慮すると、さらに道徳と美学（実践と価値論的生）への志向性が、私たちがスワンにおいて考えようとしている<趣味>に含まれるとできるだろう。それは、最善のものではないにしても、休息と並んで息抜きの間とプルーストがする社交界 (IV, 565) を修業の場として活用する。しかし、この修業は本番でもある。

つまり、スワンはこれらの社交界の連中から、「少なくとも社交生活に関係したあらゆる面で、さらには、知性の領域にむしろ属する不随的な社交生活の部分、つまり会話の面で、かれらの趣味や嫌悪をじつによく注ぎこまれていた (I, 249)」。

つまりは、懷疑主義である (I, 243)。この重宝な緩慢な無関心薬は、社交生活での交際のマナーや他者との接触のあり方が、具体的な事実に対する判断に増して、ある種の好悪の感情を対応の基準とすると、そこで生き抜くためのかなり有効な策である。社交における表層での対応能力において先行するのは、その場での反応の速さ、つまり、逃げては攻める時点に対しての、むしろ無機的な敏感さという、ゲームの特質であるスピード感への勘（センス）といえるかもしれない。

人を熱狂にかりたてるゲームとは、定められたルールのもとに展開される、限定のある時空間内での出来事である。人は、ルールに則りつつ微細な動きに対応する野心・征服欲に先導されて、とりこまれていることの全体に対して必死に考えて（工夫をこらして）対応する。しかし、そこから身を退いてみれば、結局はどうでもいい<こと>の争い（対応すべき速度と、求められる動きの些細な強弱と優劣関係に取り込まれること）に力を使い果たしているのだ。しかし当然ながら、ゲームの妙味は、ルールの<知>よりも、短い幅での必然と偶然の運動性、しかも挑発を内在する運動性にあるのだろう。そして人生ゲームにおける運動性とは、影響をこうむる当事者の理解をも越える<時>の関与ということになるだろう。

人生ゲームにおいて、<知>と<時>をつなげるとは、どういうことだろうか。「遅延された反応なしには、あるいは、それとの関連を抜きにしては、行動に対する意識的または知的な

統御は行使されないだろう。というのは、知性が行動の決定に作用するのは、このような選択的反作用の過程——この過程は、反作用が遅延されるからそれだけ選択的である——を通してだからである⁸⁾」とミードはいう。反作用の遅延は、選択を不可にしもすれば、同時に選択を人間であることの〈知〉の中心的な要素とする。それは〈知〉を動的なもの、つまり、〈時〉の介在するものにするということだ。

〈知識〉に関しては多くの言葉がある。それらは生き方、しかも時をかけた生き方に関わるはずだ。〈知識〉を欠くとき、人は「陋劣さにおいても洗練と多様性に欠け、単純で露骨であり」、こうして「無知と卑屈と傲慢は一体となる⁹⁾」という観察がある。それは、〈時〉を自らに与えることのできない貧しさである。「知識それ自体にはさほどの意味はないのだろうが、知識を手に入れる過程で身につく教養なるものは重要なのだ」という思いは、〈時〉を介在させない〈知〉の無機的な弱さを語っている¹⁰⁾。人生への〈知〉がゲームにおけるよりも切実なのは、人生ゲームからの身の退きかたの距離感があてどもなく無根拠であり、退き方そのものもゲームの一部として執拗に関与してくることである。囚われている状況を自分のものとしようとして、他者をも含む状況の認識において機能するのが自己欺瞞的なものであるという皮肉は、〈知〉では計りがたい人生ゲームからの呼び掛けであり、それを知のパースペクティブのイロニーと呼ぶことも可能だろう¹¹⁾。

②自然、または事実という概念の罨と恣意性

対オデットとの恋において、スワンがたどる精神的なプロセスがある種の典型を見せるために、プルーストは物語の始めに、スワンとオデットの恋の組合せを、ひとつのタイプとして設定している。二人の出会いが前提とする中年に達したスワンの精神的な位置は、以下のように描かれる。

生涯のこの時期にあつては、人はすでにいくどとなく恋におちているはずだ。そこでは恋愛は、われわれのひびの入った受け身の心に対しては、未知の宿命的な固有の法則に従って、ひとりで進展することはもはやない。われわれのほうから恋愛の助太刀にでて、記憶により、暗示によって、恋愛をねじ曲げるのだ。(…)われわれは、われわれの内にすっかり刻みつけられた恋の歌を持っているのだから、(…)だからもし女性が歌のなかほど(…)あたりから始めてくれるなら、われわれはこの音楽に十分慣れているので、彼女が待っているところで、ただちに彼女に追いつくのだ。(I, 193-4)

言語記号の基本とは言い換え作業といえるが、「ひびの入った受け身の心」とは、実は尊大な能動であって、それは自らに暗示をかけて対象を命名する。他者に対応することが、即、恣意的な読み取りの確信となるとされる分裂親和をもじれば、スワンの取る態度は、期待した驚きの連続を生きようとしながら、実は驚かないために待ち構える姿勢である¹²⁾。

その一方のオデットにあつては、発言内容もきわめて場当たり的なものであるが、それがス

ワンには確固としたものとうつり戸惑いを覚える。オデットが人に対して取る「ベビー」扱い¹³⁾であるが、人を「ベビー扱い」するとは、ゲームのルールを拒否するものであり、能力（世界内での機能）を問い詰めるときの尺度の無効のありどころを知っているということだ。ところが彼女の自己規定であるが、「おえらい方々の前では、私なんかは蛙のようなものですね (I, 195)」といったように、用いられる比喩も突飛であって、彼女が他人をベビー扱いすることにしても、それは彼女の体系的な戦略ではない。オデットの安定した自己認識は、自己を問い詰めないことにあるのであって、そういう無方法に太刀打ちできないのがスワンである。

オデットは「魅力はあるが、身持ちのいい女でも、頭のいい女でもなく (I, 224)」その知性の俗っぽさは明白である。しかし、「知的なところはなかったけれども、オデットには自然のままという魅力があった (I, 360)」。たとえば彼女は、スワンには疑わしく思える彼女の行状が窺えるブローニュの森でのことを問い詰められて、「その時の光景を、ごく率直に身振りをまじえて語ったので、スワンは息をはずませながら、すべてを眼前にするのだった (I, 360)」。この彼女の自然のままとは、自らの表現に他の地点から反省的な考察を加えることがなく、それゆえに、他の基準があるとは仮定できるものではないとするゆえの自然さとできる。しかし、それはむしろ彼女が、別の或る可能性を意志する自由を行使しながら、しかもそのことを恐れてはいないということではないだろうか。

サルトルは言う。「自己欺瞞を自分にあてがう者は、自分の自己欺瞞についての意識をもっているのだから。というのも、意識の存在は存在意識であるからである。したがって私は、すくなくとも私が自分の自己欺瞞について意識している点では、誠実であるはずであるように思われる。しかしそうすると、自己欺瞞というような心的構成そのものが無くなってしまう。…それにもかかわらず、やはりそれは、自律的で持続的な一つの形をあらわしている¹⁴⁾」。ひとつの意識の統一であるはずの自己欺瞞において、そこで、想定しなければならないのは、自己演出への恐れを介在させない、分断されつつ機能する自動性である。自らの総体をどこかで無視しつつ突進するような動きにともなう浮遊感を人は感じつつも、反省的認識は間歇的に後からくる。オデットにおいて極端な形で見られるのは、手探りの生成としてある人間の〈今〉の自然である。

そんな彼女は一方では、〈モノ〉の外観に認める実体性と、その名称としての言葉が体現する価値観との間に直接的な対応を見る。たとえば人物評定においても、「骨董品あしりを好み、詩歌を愛して卑しい計算を軽蔑し、名誉や愛を夢見る人間を、彼女は他の人間よりも優れた選ばれた人間としていた」のだが、しかしながら彼女から優れていると思われるには、「そういう趣味を口にしさえすればいいのであって、実際に持っている必要はなかった」。スワンのように、「そういう趣味を持っていながら口にしない人間は、彼女の心を動かさなかった (I, 241)」のである。

一方のスワンは、つねに媒介を通して対象に向かう。彼女への恋心が醒めた後になって彼女と結婚してからも、彼女を二重の媒介（時と写真表象）を通して見るという、強迫的な対応を彼は見せる。すなわちスワンは彼の部屋に、妻の現在の美しい写真に代えて、「それに先立つ、

ごくみすばらしい古い銀版写真を置いていた。そこには、いまのオデットの若さと美は、彼女によっていまだ見つけられてはいず、見当らないように思えた (I, 606)」。スワンは作為的な記号の読取りを試み、＜時＞の外に置いたオデットにむかって、＜時＞から逸れた一時を過ごす。両者にとっての＜事実なるもの＞の異質の構成は、スワンがオデットを所有しようとする最悪の野心において、様々の形で見えてくる。彼が抱えていた空虚にもかかわらず、すなわち、「絵画の眼、そして風俗の観察力に勝れていたにしても、その眼、その精神が、彼の生の無味乾燥の消しがたい痕跡を永久にとどめているスワン (I, 234)」の空虚にもかかわらず、彼は本当に恋をしてしまう。それは、本当の＜事実＞を言葉によってつきつめる過程でもあったのだ。

③実在性と時と勤勉

先に、スワンの「ひびの入った受け身の心」を見た。一方、スワンという「知的な人間」の категорияは、以下のように定義されている。スワンは、

なすこともなく日を送りながら、そうした無為は、彼らの知性に対して、芸術や学問が果たしうる興味に値する対象を与えるものであり、「人生」はいかなる小説よりもおもしろく、より小説的な状況を含んでいるとする思想に慰めと、おそらくは口実とを求めるような知的な人間の categoria に属していた。(I, 190)

生命によって生かされているという単なる受け身の事態が＜人生＞と呼ばれるとき、それはあらゆる意味作用の材料となり、人はそこに、自らに関与するかぎりでの利己的な価値を自らの＜世界＞として構築する＜知＞を養う。こうした＜人生＞とは概念であって、概念とは、特殊性の一般性への組み入れであり、事物を意味へと歪める。これと同様に、＜現実・事実＞という概念も、含められる意味の限定を免れがたいのであって、コード化された関係連鎖を、私たちは世界・現実とするといえる。そこに機能している言語現象はまさに、本稿が鍵概念とするシネクドックが担う、包摂関係にもとづく意味的伸縮現象である。＜人生なる（としての）現実＞と＜言語なる（としての）現実＞、つまり＜人生がある（意味がある）という真実＞と＜言語がある（知が意味を認識する）という真実＞の真実の程度は、支えあう。そうすると、無為を意味あるものとみなす思想とは、生きるという程の長さのない瞬時においても＜存在している人生＞と言葉の並列への寄り掛かりではないだろうか。

だが、＜無為＞を脱するだけでは、人はまた別の罠に落ちる。たとえば、スノップとは勤勉な人たちなのであり、「生まれながらの病的なスノップ」であるブルジョワ出身のカンブルメール若夫人にとっては、「彼女自身のつきあいの限界を超えて、公爵夫人たちと交際するまでに上昇しようというのが、彼女がその努力のすべてを傾けている目標であった (III, 315)」とされる。そのような熱意とは、一体、何なのだろうか。ブルーストは排他性を恋に結びつけ、ある人を他の人よりも愛するために必要なのは、「その人間に対するわれわれの好みは排他的

になることである (I, 227)」とするが、スノップの勤勉さも、異様に排他的であり、目標とする価値に対立するすべてに対して激しく警戒する。排他性には、同時に尊大な情動性があり、その情動性が作用するところとは、意味作用の確認を放棄する地点なのだ。そこには勤勉な怠惰という、不安を持つゆえの盲信的な従順さがある。

カンブルメール若夫人は、たしかに知識が豊かな人物である。豊かであるその知性だが、いふならば生命力に欠けている。すなわち、「彼女にとって十分にモダンではない哲学者であるライブニッツは、知性から心情にいたる道のりは長い、と言っている。カンブルメール夫人は、兄のルグランダンと同様に、この道のり (trajet) を歩ききるだけの力をもっていなかった (III, 315)」。彼女の知識習得の方法は、自律して動く「力」を知識に与えない。というのは彼女は、「スチュアート・ミル¹⁵⁾の本をおけばすぐに次はラシュリエ¹⁶⁾を読まずにいられない」のであり、その繰り返しの果てに、彼女は「しだいに外部世界の実在を信じなくなっていく、そうなるにつれて、死ぬ前にその外部世界でさらに地位を築こうとする熱意はますます増していった (III, 315)」ということなのだ。論理的勤勉と感覚的怠惰は一つである。外部世界の実在を疑わせるような理知的な勤勉とは、世界を捉えようとする自己を位置づける<時>の作用にたいして排他的なく知>であろう。認識と行為 (意志) のあいだの時差を認めず、ゆえに直接的な存在を確認しうる物に戻るのであり、「知から心情」への道のりには踏み出さない孤立した<知>である¹⁷⁾。孤立を出てつながりの中にある<知>は、<時>の実体であるプロセス感を糧とし、実在性の観念に強迫されるままにはならないだろう。

スワンは、ソルボンヌ大学教授のブリショの冗談を、学者ぶった、低俗で、胸が悪くなるねばっこさだと思っている (I, 249)。たしかにブリショは博識である。それは、物事を体系としておさえているということだが、その知性に動きを加味すると、知性 (intelligence) と才気 (esprit) の関わりを考えることになるだろう。そうすると、「ブリショのような才気 (esprit) の種類は、現実的な知性 (intelligence réelle) と両立はするが、スワンが若い頃に馴染んだ交際仲間では、愚劣さ overwhelm と取られたろう (I, 249)」ということになる。才気が实际的な知性に馴染むのをスワンの仲間は受け入れないということは、理解できる。しかし、「頑健できわめて充実したこの教授の知性は、スワンが才気がある (spirituel) と思っていた社交界の人たちの多くに、多分羨まれたことだろう (I, 249)」ということを知ると、知性のあり方自体とその現れは、微妙に異なったものであると理解できる。

そのことを考える手がかりは、<事実 (réel) の知>の真に困難で、それでいて何ものでもないあり方だろう。問題は、<生の事実>と<知>の関わり方である。たとえば博学のブリショであるが、彼における<生活 (vie) にたいする過度の盲信 (superstition)>は、ヴェルデュラン家の集まりで、「哲学や歴史について話をするときには、好んでもっとも实际的 (actuel) なものから比較を持ちだ (I, 247)」させた。というのは、「まず彼は、哲学や歴史学は生活への準備でしかないと考えており、この集まりにおいて、彼が本においてしか知らなかったものが行動となっているのが見られると考える」と同時に、「かつてある種の主題 (筆者注：生活上のありふれた实际的なことがら) に対する尊敬の念が頭に染み込んでいたのを気づかないま

まに残していたので、そういう問題を大胆率直に扱うことで、大学教授の殻を破れるという気持ちになったから」でもあるのだが、じつは逆に、「彼にとってそれが大胆に見えたのは、彼が大学教授のままだったからだ (I, 247)」とされる。プリショが盲信する生活を表わす単語 *vie* とは、生命でもあれば、人生をも意味する。同一の語で表現されながら、＜日々の生活＞と＜人生の意味＞のあいだには過程が介在し、その過程において、*vie* の3つの意味（生命、生活、人生）が合体する。人は、3者が合体するべき＜生＞の言語による捉え方において、恐れすぎるか侮りすぎる。それは、つねに *vie* の周囲に、そして中心にある人間は、それを体現しつつ捉えられないという＜リアリズムの罫＞に落ちているからだ。＜現に在る＞ということだけでは、なにものにもつながらずにしても、そこでの各瞬間に、すべてがある。その＜事実・事態＞に時間をかけて耐えることが、「知から心」への道のりなのだろう。

この問題を語る一つの例は、スノップの典型とされるカンブルメール若夫人において見られる。すなわち、「リアリズム芸術に夢中の彼女にとって、みすばらしすぎて画家や作家のモデルとなるのにふさわしくないといったような対象は、一つも存在していなかった。社交界を描いた絵や小説は、彼女に吐き気をもよおさせたことだろう (III, 315)」ということである。人が世界に対して、外的自然の人間的作用としてあるようにしてある事柄に対して自認する寛容さと非寛容さの区別は、人を捉える器としての世界への屈伏と、一方の内化された自然としての人間のあり方の受け入れに対する狭さである¹⁸⁾。ゆえに、こういう反応が平行して養っている彼女の「芸術にたいする」信念とは、「トルストイの描く農奴やミレーの描く農民は、芸術家がそれをこえてはならないと彼女が考えていた社会的な極限であった (III, 315)」ということになる。彼女が見せるのは、茫洋たる＜事実＞への尊大な支配欲と、その一方で、＜私という自尊＞が自己に固有として受容する限定された審美的な存在としての認識のずれである¹⁹⁾。両者は、＜時＞の幅にわたって、誰にでもは近づけない質において、相対する姿を見せるはずだ。

スワンにおいてはどうか。彼の「ひびの入った受け身の心」は、その基底に、受け身性と補完的な関係にある審美的な享受の姿勢を持っていた。すなわち、「すこやかで、豊かなバラ色の肉体はスワンの感覚を目覚めさせた (I, 189)」というように、受け入れのたやすい対象への嗜好を彼は持つ。スワンにはそれに加えて、ある種の知識を要する偶像崇拜という、変わることもない趣味があった。すなわち、「日頃からスワンは、巨匠の絵のうちに、われわれを取り巻く現実の一般的な特徴ばかりではなく、その反対に、一般性のもっともすくないと見えるもの、私たちの知り合いの顔の個人的な特徴を見つけて喜ぶという特殊な好みを持っていた (I, 219)」²⁰⁾。そのことは、一般的な意味付けと特殊個人的な特徴のあいだの類似を見いだすだけの芸術家の資質を、彼が持っていたということである。しかし、スワンのこの趣味の理由を、プルーストは以下のように解説する。すなわち彼は、「多分、自分の生を社交界での交わりや会話に狭く限ってきたことへの悔いをつねに持っていたので、これらの大芸術家もまた喜びをもって眺め、そして彼らの作品に、現実と人生 (*vie*) の特殊な証明、つまり、現代的な (*moderne*) 香りを与えているこれらの顔を描き込んだという事実、彼らから彼に与えられ

た寛大な許しがあると思っていた (I, 219-20)」というのだ。スワンの強引さは、moderne の語の使用が、スワンの生活の〈今〉と、芸術作品の〈今〉の通用性を結びつけるところにみられる。しかし、画家にとって創造であった作品への過程・道のり (trajet) は、そこに鑑賞的・観照的に関わり、エピソード的にそれを自らの今の日々の生活の飾りとするスワンの納得とは、異質である。

この脈絡において、スワンは恋の初期においても、オデットとボッティチェリの絵の人物との類似から、彼女にもまた美しさを認め、彼女をいっそう大切に思い、彼女に会う喜びが彼の審美的な教養において正当化できるのを喜ぶ (I, 220)²⁰⁾。しかし、オデットにおけるボッティチェリの絵との類似点は、スワンが肉体として好む質ではない。スワンはこうして、享受対象としての即物的な美 (I, 189) を好みつつも、それに反するところの、「表情の深みやメランコリー (I, 189)」といった彼の好きな芸術家の彫刻や絵画作品に見られる女性の美を、自らの存在倫理にもからませて、オデットを媒体にして身辺に捏造する。彼にとって好ましい表象体を得る手段として、オデットは配備される。スワンにおいて、〈ヒト〉と〈モノ〉自体と、それらが意味するものとの恣意的な組合せによって、潜在的で恣意的な物語性が発生している。そこに身勝手な所有欲があることにスワンは気づいていないにしても、次のエピソードが語るのは、スワンのオデットへの恋がまもなく向きあうことになる狼敗のあり方である。すなわち、ブルーストは一般論として、上下のある関係性において潜む逆転を語る。つまり、「粹な人間がその粹好みを無視されることを恐れるのは、貴族からそうされる場合ではなく、田舎者からそうされる場合である。この世が始まって以来、人間が浪費した機知の苦労や虚栄からの虚偽の四分の三は、彼らをただおとしめたにすぎないが、それらは劣等者を目標としていた (I, 189)」という。スワンにあっても、公爵夫人となら、なんのこだわりもなくのびのびしていられるのに、小間使いの前では軽蔑されはしないかとびくびくしていた。虚栄が誘発されるのは、自身が〈意味するもの〉であることをコードを共有しない他者に強いるときである。

こういったいまだ余裕のあるスワンのあり方を、ブルーストの用いる〈趣味〉という概念でまとめると、オデットに恋するまでのスワンの〈趣味〉のあり方は、奇妙な二元論・非連続であったといえる。スワンにおいては、「ちょうど芸術に対する趣味が肉欲とは独立して発達している多くの人間と同じように、彼が両者それぞれに与えた種々の満足の間には奇異な不調和」が見られた。「ますます品が悪くなっていく女性との交わりにおいて、彼はいよいよ洗練された芸術作品に惹かれ、聞きたいと思っていた類廃的な劇の上演に小娘の召使を仕切り棧敷に連れていったり、印象派の展覧会に連れていく一方で、教養ある上流社会の女性でも、これらの作品を、この小娘以上に理解できるわけではなく、それでいて、この小娘のようにおとなしく黙ってはいられないだろうと信じていた (I, 242-3)」。

このように、オデットに会う前のスワンにおいては、自身の感性に求めるディナミズムは広がりつつも、価値の二重性を操る余裕が対象との関わりにおいてあった。つまり、精神の過程としての探求に取り組みながらも観照的態度をとり、その〈事実〉の場の同伴者には、意味の探求を意識しない者、もしくはそうであると判断できる者を選んだというのは、畏れを感じる

遙かなものに無関与である生け贄をそこに捧げることによって、自らは慰めを得るという、自虐的な関与であり逃避に自足していたということだ。それは、動揺への防御でもある。整然としたスワンのこの擬態は、しかし、オデットへの恋において揺さぶられることになる。

すなわち、このスワンが恋をして、軽薄な生活が消し散らしていた若いころの靈感がよみがえるのを感じる。だがスワンは、「回復しかけた自分の魂とただ一人家で向かい合って過ごすときの微妙な喜びをいまや味わうようになった」にしても、「そうした長い時間の間に、徐々に彼自身に、といっても他の人間に隷属した彼自身に帰っていった (I, 235)」ということであり、そこでは、自己発見であるような喜ばしい自発性は冒涇である。「喜び」は、具体的な外界での対応物としてのオデットに依ることによってのみ安心を得る。オデットにおいて体现され一元化された事実 (réel) の感触の強さに、スワンは抗うことができない。しかしながらオデットの強さとは、彼が彼女に見だし合成する意味連関の密度でしかない。スワンの恋とは、スワンがオデットの肉体と記号オデットに向かい合って恣意の読取りの主体として恋をするという、底無しの自在な葛藤であるが、そこでの彼の葛藤自体が、おのずと自らの所在を知る文体を見せるのである。

④メトニミーとシネクドック

vie という一つの語がはらむ3つの意味 (生命、生活、人生)、その事態から派生するところの<事実という概念の罣>、そして<実在性をめぐる受動と能動>、これまで用いたこれらの概念は、メトニミー、シネクドックの語法にからめて論じることができる。メトニミーの語源は代理・代替であるが、その意味で、それは記号表現そのものであり、言葉に収められる世界認識の形としてのメトニミーは、連想によって結ばれた広い意味でのコード化された関係に根ざした<現実・事実>であって、コード化されたメトニミー的な連鎖が、<現実>と呼ばれるといえる。意味連続の生成を、時間的・抽象的な<モノ>にも託して、メトニミーがメタファーと同様に、実体のないものを実体化することになるように、自らの物語を紡ぐ言葉において、人は、意味の横滑りを重ねる。先に見たスワンのあり方、「無為においても人生の意味を求める」態度こそは、メトニミー的対応の墮落形であろう。

その手続きにおいて生きる技法がシネクドックであると言える。シネクドックは、より大きなカテゴリー (類) と、より小さなカテゴリー (種) との間の、規模の恣意的な措定と抽出された典型が関わるところの、包摂関係にもとづく意味的伸縮現象である。そして類関係から、一般化、実体化がおこり、そこに人が陥る罣がある。たとえば、スワンの趣味・好みは、日々の生活世界に見るものと、芸術作品中のものに類似を見ることであった。それぞれの質と細部を加減することで、スワンは自分を取り巻く意味作用を指定するが、それは<世界>の緊密化にもなれば、一方、単純化にもつながり、非連続を越えて連続させる一つの状態のとらえ方において、世界を発見すると同時に、慣性 (墮性) ともする作業である。さらには、恣意的な主体が、自分にとっては<世界>の方こそが不出来なのだとする奢りにもなる。

極端な二元論は、対象とそれを評価する自己の双方での自己否定を導きだす。それは、世界

への悪意ある怠慢、尊大なニヒリズムである。知識人を論じるブルデューは、純粹教養とアンガジュマン（文化と政治）との関わりの脈絡においては、**「二つの次元を同時に最大限に追求すること」**が、**「知識人の本性の逆説性」**である²¹⁾とする。彼はさらに、**「目的においてももっとも激烈なユートピア主義というものは、手段においてももっとも明敏な現実主義と両立可能なものだ**と確信する」²²⁾とも言う。文脈を異なえての引用ではあるが、**<事実>**との取り組みとは、明敏で激烈な意識と行動を要することが示唆されている。

⑤言説としての現実主義

小林秀雄の語り口、**「私はただ次の平凡な事を言ひたかったに過ぎぬのだ」**を出発点として、佐藤信夫は**「言語という制度と表現者」**を語っている²³⁾。小林は、**「私はただ次の平凡な事を言ひたかったに過ぎぬのだ」**と述べ、マルクスとバルザックという二人物は**「己れの仕事の前提として、眼前に生々たる現実以外に何物も欲しなかったという点で、何等異なる処はない」**とし、さらに**「二人はただ異った各自の宿命を持ってゐただけである」**²⁴⁾と続ける。文中に組み合わされた**「ただ平凡な（…）を言ひたかったに過ぎぬのだ」**と**「生々たる現実」**の表現こそは、（オデットに恋する前の）スワン・カンブルメール若夫人方式につながる**二元論的レアリズム**の情緒的な提示である。**「ただ…言ひたかったに過ぎない」**小林は、謙譲表現によって語りを和らげながら、そうとは見せまいとしながらも、探求の中途放棄を内包している言説を繰り出す。その言説は佐藤によれば、**「何か、核心に触れる、きわめて語りにくいことを、ああでもない、こうでもない、とことばをつくして、ひとくぎりやと語りおえたとき、いわば、いらだちのあとに、ほっと息をつくように」**²⁵⁾現れる。さらにそれは、**「意味上のちいさなクライマックスとして、あるいはアンチクライマックスとして、登場する」**と佐藤はする。クライマックスとアンチクライマックスが同一であるという、意味の破綻が情動的に組み込まれている言説の特徴を示す小林のこの**「思考のくせ」**²⁶⁾は、**「静かな悲鳴」**²⁷⁾ともされる。悲鳴とは、**激烈な明敏さ**を持ってないままで、しかし自足できないことを知っている言説が、外界からの全ての呼び掛けを断ち切ってたてる音である。

小林の見せる**「特異な真剣さ」**に加えて言及される、彼における**「審美と倫理と真偽の奇妙な韻」**²⁸⁾が、佐藤による負の評価を受けているとは取れないのだが、**「奇妙な韻」**に埋没するとは、対他（像）としての自らの**見せ掛け**をとおしての他者攻撃と、自負の裏返し**の自己否定の一体化**をとることだろう。存在感覚に押しつけられるこの自虐的な困難は、**全体性**という肥大化した理念の前で人間が持つ困難でもある。ナルシシズムには、自己否定と自己容認（可能態詮索の不安）が敵対関係としてひとつとなっている**自負心**、そして即時の享楽、決着への要請があるといえる。

小林が繰り返しみせる**「思考のくせ」**は、恋に落ちたスワンにおいて、うまく方法とはなっていない。冒頭で見たように、高級娼婦であったオデットに、知性とセンスで勝るスワンは出会う。やがて彼はオデットに恋をする。以下の引用は、そんな二人を見まもるある作中人物による言葉である。

その夜レ・ローム大公夫人は夫に言った。「かわいそうなスワン、彼は相変わらず感じのいい人だけれど、とっても不幸そうね。(…)でも本当のところ、あんな知性の持ち主が、あんな女、皆が馬鹿だといってる面白くもない女のために苦しんでいるなんて滑稽だとももうわ」と、彼女は才知のある人間は、苦勞のしがいのある女のためにしか不幸になるべきではないと考える、恋をしていない人間の観知をもって言った。それはまるで、点のような細菌という存在によって、どうしてコレラに罹って苦しんだりするのかと意外に思うようなものだ。(I, 337)

「恋をしていない人間の観知」からの憤慨は真正であって、そしてまた正当ではない。恋をしたスワンは、正当な愚かしさを生き、レ・ローム大公夫人にとっては不当な恋愛を生きる彼とオデットの組合せのちぐはぐは、以下の会話を成立させる。それは、オデットとスワンにおける、ごく日常的な会話での「審美と倫理と真偽」をめぐる言い合いともいえるものだ。たとえばスワンが彼女に、「芸術的な美はどこにあるのか」とか、詩、絵画はどういうふうに鑑賞しなければならないのかを教えようとするときである。すぐに彼女は耳をかさなくなって「まあ、そうなの…わたしはそんなふうには思ってもいなかったわ (I, 237)」と言いだす。生身のオデットの身近から離れたくないスワンの対応は、ひたすら消極的である。

そこで彼は、彼女の失望が大きいものだから嘘をつくほうが良いと思って、今まで自分のいったことはなんでもない、ほんのくだらないことだ。自分には深く研究する暇がなかった。何かほかのものがあるだろうと彼女に言う。しかし彼女は彼に強く言うのだ。——「ほかのものですって？何？それなら、それを言ってちょうだい。」しかし、彼はそれを言わなかった。(I, 237)

強く問い詰められてスワンは黙してしまう。「言ったところで、彼女の望んでいるものとはどんなに違っているか、平々凡々で、感動や悲痛を誘うことも少ないのを知っていた (I, 237)」からである。世界の享受の＜方法＞を心得ると自認するスワンであるが、その＜方法＞の優越性が、彼女風に生きているオデットにとっても絶対的に優越したものであると信じるのではない。そしてそのままスワンは、「静かな悲鳴」をあげないままで、生身のオデットに執着していく。

そして実際、彼女はスワンを知的には、思っていたよりも劣っていると考えていた。
——「いつもあなたは冷静で、わたしにはあなたが分からないわ」(I, 238)。

彼がオデットに「ほかのものとは何か」を言えなかったのは、「芸術に幻滅した彼女が、恋にもそうなるのを恐れたからである (I, 238)」。彼はオデットに、＜現実＞の感触を委託したのであり、それは全面的な委託とならざるをえなかった。

⑥接触の難易度

オデットにとって「スマート」²⁹⁾と映る人物について、粹[・]ということをめぐる二人のやりとり (I, 239) がある。彼女においては粹[・]は、粹[・]な人が出入りする場という空間的に自明な構成性として、隣接性という浸透による意味づけを受けた循環する場 (人) の列挙によって捉えられる。

「あの人は粹[・]な場所にしか行かないのよ」

そこでもしスワンが彼女に、それはどういう意味なのかと訊ねると、彼女はいくぶん軽蔑したように答える。――

「まったく、粹[・]な場所ってということなのよ！あなたのような年の方に、粹[・]な場所がどういうところか教えなくちゃならないなんて、わたし、どう言えばいいのかしら？まあ、言ってみれば、日曜日の朝のランペラトリス大通り、5時ごろのプーローニュの湖のひとめぐり、木曜日のエデン座、金曜日の競馬場³⁰⁾、それから舞踏会……」

「どんな舞踏会？」

「パリで催される舞踏会だわ、粹[・]な舞踏会ということよ。ほら、あのエルバンジェ、株屋の店にいる人よ。ご存じ？」(I, 239)

オデットの意味するところのこの粹[・]の特徴を、ブルーストは「誰でも直接に近づけるという性質 (I, 239)」とする。物理的自然、そして人間文化としての具体的な構成体には、一応、「誰でも直接に近づける」とするなら、「誰にでもは直接には近づけない性質」のものとは何なのだろうか。私たちは『スワン家の方へ』の冒頭での語り手＝作者の思いとして語られる「ケルトの信仰」をここで思いおこす。

私はケルト人のあの信仰を、きわめて理由のあることだと思うのだ。それによると、失われた人々の魂が、なにか劣等な存在や獣や植物や無生物の虜となっており、たしかに実際のところ、私たちがその木のそばを通ることになったり、彼らを閉じこめている物体を手に入れたりする日まで――それは多くの人には訪れないものだが――私たちにとっては失われているのだが、そういう日には、魂たちは震え私たちを呼び、私たちが彼らを聞き取るや呪文は解ける、そして私たちによって解放された魂たちは死に打ち克ち、私たちとともに生きるために戻ってくる、というのだ。(I, 43-4)

ここでは、偶然の接触が契機であるにしても、その「誰にでもは訪れない」機会を「聞き取る」という積極性、つまり、接触を感知する積極性が示唆されている。

メトニミーの作用としての、世界構成に関与する感性の特質である隣接性は、「事実において、あるいは思考において³¹⁾」の隣接性であって、隣接する<モノ>とは、空間的親近性においての<モノ>の取り合せでもあれば、行動様式の外見でもある。その意味で、<人間>と

は、出入りする場と一体化した＜動的な場＞としての表現・伝染力を有するのであって、そのあり方こそが、社交界に作用する＜力＞である。先のスワンとオデットの会話は、以下のように続く。そこでは、接触・伝染という作用の通俗性、すなわち、＜事実＞のぬり重ね、比較級の誇張、細部の誇張、典型の列举、つまりは、表層的な派手さに託された意味作用が示される。

むろん、ご存じのはずよ、パリでいちばん有名なひとの一人ですもの。若くて、すらっとして、金髪で、ほんとうにスノッブよ。いつもボタン穴に花を挿して、淡い色の短いコートを着て背中に髷があるの。いつも厚化粧のおばあちゃんと一緒に、そのひとをどの初演にもひっぱっていくのよ。(I, 239)

こういうオデットに対してスワンは、「彼自身の考えがより真実なわけではなく、同じように愚にもつかない、くだらぬものだと考え」、「粹にたいする彼女のこうした考えを少しも変えさせようとはしなかった」(I, 240) のだ。

「すべて」は他のすべてと同じように「ほんのくだらないこと」でしかないという認識は、人の存在意識の相対性の闇の前での深い沈黙でもありうる。だが実際はスワンは、心から全価値をオデットと共有することを欲したのである。彼女にとって大切な「お茶」に招かれたスワンは、前の年から流行していた菊に反発していたのであるが、室内に、「まるで温室のように一列に大輪の菊が咲いていた」というのに、この時は、それらが放つ光を部屋の薄明かりに眺めて楽しむ (I, 217)。好感は、判断の前に彼を圧倒した。たしかに、彼がオデットに恋するようになった頃にも「彼の言葉づかいは、音楽への愛によって際立った一種の革新が彼に対して一時の間失わせていた精神の癖の痕跡を留めていたので、彼はときに、自分の意見を熱をこめて語 (I, 256)」ることはあった。音楽とは絶対であり、相対的な感覚を放棄させ、そして言葉を放棄させる。しかし、スワンに根深くある精神の癖は、オデットにはないこだわりとして、彼に熱をこめて自省的であるという傾きを持たせることで、人生の知からの身の退き加減への自問自答に、あいかわらず終止符を打たせない。そして、いまなお残るこの熱をもって、いま、オデットの捉えがたく映る二心にスワンは嫉妬し、そしてたしかに「真実に対する熱愛」が蘇えるのを感じるにしても、それは、オデットの行為、彼女の交際する人々、計画、過去をその唯一の対象とするのだった。つまり、彼女（特定の存在 être particulier (I, 235)) を無限の価値とし、ほとんど個を離れた客観的な美しさを持った対象とするのであって、それはつまりは、「個人的な真実 (I, 269)」に対する熱愛だったのだ。

特定の存在への執着は凝集する。オデットに恋をするようになってからは、スワンには「彼女と気が合うということ、二人で一つの心しか持たないように努めることが実にいい気持ちなので、彼は彼女の好くものを好きになろうとし、彼女の習慣を真似るだけではなく、意見も採用するということにいいよ深い喜びを見いだした (I, 242-3)」。たとえば、少し近眼のスワンは社交界にでるときには片眼鏡をかけたのだが、オデットはそれを見て喜びを抑えられないように言う。「男性には文句なしにとっても粹だわ。あなた、なんて素敵なんでしょう。本

当のジェントルマン (gentleman) のようだわ。ただひとつ肩書きが足りないだけよ！」

彼はこういうオデットが好きだった。あたかも彼がブルターニュ女に恋した場合、彼女が頭巾をかぶっているのを見、幽霊を信じているというのを聞いてうれしがると同じように。(I, 242)

自身の構築する精神世界の虚構性を維持するのに疲れたかのように、スワンはオデットの世界の完結している狭さを快く感じる。すなわちスワンは、「彼女があらゆるものに対して持っている俗っぽい考えや悪趣味に逆らわないようにと努めたのだが、彼女に由来する全てと同様に、じつは、これらの通俗的な考えや悪趣味は、彼を魅了さえした」。というのは、「これらはそのおかげで、この女性の本質が彼に現われ、眼に見えるものとなる特殊な特性であったからである (I, 241-2)」。〈彼女〉の部分である属性のそれぞれは、恋するスワンにおいて、強い連結力を示す。記号の読取りの容易さ、通俗性（最大公約数的意味作用）という甘さ、スワンはこの連鎖に取り込まれる。上記の引用には、一つの形に見事に収束しようとしているスワンに対する十分な皮肉と、一方には生活人スワンが生きる自然さがある。深い喜びを感じる主体に、一体どう批判を向けることができるのか、という思いも当然なりたつ。だが、生の慰撫を享受する態度と、それを探求とする態度とは、プルーストにおいて一つでありつつ、たしかに描き分けられている。

vie の表わす3つの意味（生命、生活、人生）が合体する幸いとは、世界の連鎖が時の幅において人に与える幸いと言い換えうる。そして、世界の「メトニミー構成」は、誰でも直接に近づく質と同時に、誰にでも直接には近づけない質を体現している。世界内に生きることとは、両様の質との関わりにおいて〈迷うこと・失うこと〉と〈見いだすこと〉が一つである過程に身を投じることである。私たちはここで、生を浪費した、芸術のディレクタントとして生きたスワンの〈生〉について語り手が語った言葉、「心惹かれる（魅力ある）失敗（過失）erreurs charmantes を思いおこす。さ迷わせるほどに人を魅了する〈世界の連鎖〉の罫について、さらに考えよう。

⑦通俗性、緊張から弛緩へ

メトニミーの動きの察知の基底には何があるのだろうか。まず、身体感覚ともいえる世界の物理的な堅牢さである。オデットの「俗っぽい考えや悪趣味に逆らわないよう努めた (I, 241)」スワンがそこで酔うのは、見通すことのたやすさであり、自足的な慎ましさであり、共有性の甘さ、〈俗〉の感触の容易さである。流されるままの感触とは、〈俗性〉の手応えという、日々の〈生〉のあり方といえる。〈共有価値体系〉依拠のあり方は、日常性の力である通俗性が人を誘うことで構成する馴れ合いの言説に形として見られる。それは、退くようできて押し出してくる厚かましさである。そういう言説が立脚する言葉の量が、身体的環境をつくりだすのだ。

蓮実重彦は『小説論＝批評論』の「小林秀雄『本居宣長』——方法としての嫉妬」³²⁾におい

て、小林の『本居宣長』の書き出しの一節にまず見られる「文章の通俗性」を、見逃しもできる「誰にでもあるだろう精神的な弱さ」としつつも、それらを以下のように列挙する。「いわゆるがなの台詞をあえて口にしてみる図々しい通俗性」、「慎みを欠いた言動が、自分には許されていると錯覚するものに共通する通俗性」と。叙情とテロルの不分明な馴れ合いは、知性が情動につながるときに強力なナルシシズムの通俗的な陶醉となることに通じる。ごく卑近な例としては、人に聞いてもらえると想定する語りが持つ甘えに見られるもので、その一例はまさに、小林の「Xへの手紙」の語り口である。語る「俺」が、聞く「君」に関わる部分を、冒頭部から引用しよう。

この世の真実を陥穽を構えて捕へようとする習慣がこの身についてこの方、この世はいづれしみったれた歌しか歌わなかった筈だったが、その歌はいつも俺には見知らぬ甘い欲情を持ったものの様に聞えた。で、俺は後悔するのがいつも人より遅かった。と俺は嘗て書いたことがある。今君に少し許り長い手紙を書かうと思う折からふとこの言葉を思い出した。どうもよくない傾向だと思ふ。(…)そして人並みに三十になって、はじめて自分の凡庸がしみじみと腹に入った、と言へば君は俺になんの同情も感じまい。俺としても気が楽だ。(…)

俺は元来哀愁といふものを好かない性質だ、或は君も知ってゐる通り好かないことを一種の掟と感じて来た男だ。(…)まさか度し難い男だなどとは君は思ふまい。俺は今君にこの哀愁其他に就いて書き送らうと思つてゐる。俺の様な人間にも語りた一つの事と聞いて欲しい一人の友は入用なのだといふ事を信じたまへ。——これは俺の手紙の結論だ。³³⁾

ここでは、その間に対話の成立が想定されている「俺」と「君」の2者がいるはずだが、両者は実は、一人の人間である。この文章は、メッセージとしての内容を伝える以前の、情動的なからみから成る文章であり、こうして成立した「情」の場に、(語り手にあらかじめ同意している)読者が引きずり込まれる。そういう場合の知性の尊大さは、語りが聞き手によって受け入れられるものとして自らの言説を繰り出すことにあるのであって、それは、受け入れ側の通弊の俗物根性と良いコンビを組む。

この文章において、論述は、世俗知と個別例をめぐって、判断と反問が対義結合をなし、語り手は、対立する価値意識を心得ているということを執拗に訴える。言葉は紡れながらも、語り手と意味作用との距離が感じられる。それは、俗にあつて俗に抵抗する逃げ道のある抵抗である。前出の佐藤は、小林のこの文章評として、「不思議に抒情的」な散文、「陰気な優しさ」、「知的な淋しさ」、「甘い絶望」、つまりは「青春の傲慢」を指摘する。佐藤は、「Xへの手紙」を「何と悲しく美しい、魅惑に満ちた失敗作であらうか！³⁴⁾」とするが、たしかにこれは情性の自然としての言語に寄り掛かった一人言である。

この動きにも似て、自己の<今>が負うべき振幅をはらむ連続性から逃れるスワンの姿が見

られる。それは、嫉妬に苦しむスワンが、安心させられることがないにしても、自ら判断することを恐れて、そのために、彼にとって不実としかとれないオデットに関して、「一人の人間を正しく判断するためには、世間で言われている評判に反対するだけで十分なことがよくある」という、本来、個別例にとっては、非関与である統計的な知の硬直した怠慢を支えとして、数年前に耳にした彼女の風評に反して、彼女を「善良で、素直で、理想に熱中し、ほとんど真実を言わずにはいられない性質 (I, 236)」と考えようとする姿である。それは、怠慢ゆえの受動的反転、また世俗知のメトニミーとも呼べるような現実感構成である。緊迫は一気に横すべりして弛緩する。

その動機にあるのは、オデットへの集中である。集中は緊張と弛緩を与える。すなわち、オデットという特定の存在に焦点をあわせたスワンによる世界の意味連鎖は、連鎖の動きが自律的となり、彼女について考えまいとすることは、なお考えることとなり、彼を苦しめるのだ。「彼の苦痛とは、考えるということであり、それを思い出すだけで、再現されるのだった (I, 271)」。

彼の〈知〉の作業は、不幸な、そして怠慢な勤勉である。それは、彼にたいして恣意の意味作用を果たす言語記号となった彼女が表しうる意味の無限の間に、彼が入ったことを表わす。自身の優越(余裕)を当初の支えとしていたスワンであるが、こうなると、オデットをめぐる価値認識において、事実らしいとできる自然な(自動的な)連鎖反応に直面したとき、徒労に終わると思える対応から逃れるために、観念的な論理操作とも呼べるいくつかの自己暗示法に頼ろうとする。

その一つの形は、嫉妬に苦しむスワンにおいて、「ロマネスク(小説的)と呼ばれる、あの神秘であると同時に突飛な理由 (I, 291)」のひとつ、つまりレストランが、オデットの住んでいる通りと同じラペルーズという名であることからそこに通いつめることである。突飛であり神秘でもありうる、これがロマネスクというメトニミー作用である。突飛で安易な共有化はまた、スワンを置き去りにして旅に出たオデットを思うスワンが、「もっともつよく陶醉感をさそう恋愛小説に読み耽り、また汽車の時刻表に見入って、彼女に追いつく方法を知る (I, 288)」ことでも果たされる。そこには、意味論的包含・包摂・潜関係としての物語性の恣意的な構築があり、シネクドクの原理が生きている。シネクドクの原理とは、合理主義のかたわらでひっそりと身を潜めてきた神秘主義のなかにあるといわれる。その基本は、ミクロコスモス(人間)とマクロコスモス(世界)の照応である³⁵⁾。その心理的な基盤には、呪術的な願望と祈りがあるといえるだろう。スワンにおいては、自らが囚われているイマージュの現場にたちあうための、突飛な心的トポス工作として、それは循環する独り言として機能する。

だがこのロマネスクは、神秘的な力、つまり、人が正當にも駆られて遠くに至りうる力をも持つ。それは、人がその経験に対しては「じかの意識」を持つことができず、それを「測量しようとする」と減っていき、「ほとんどゼロになる」(I, 303)のとは反対の例としてである。ロマネスクの働きを機能的に言い換えれば、「われわれが恋や嫉妬と考えているものは、同一で継続する不可分の熱情ではない。それらは、無限に継起する恋、無限に異なる嫉妬からできている (I, 366)」ということであろう。無限に分割されつつ継続する感情が質の彩をおびるの

は、究極は、「生と死」の一体性をあらわす文体においてである。「スワンの恋の生活 (vie) と嫉妬の誠実さ (fidélité) は、死や不誠実 (infidélité) や無数の欲望や無数の疑いから作られていたのであって、それらすべては、オデットを対象としていた (I, 366)」。ここで用いられている *fidélité*, *infidélité* の一組の反意語の単一因果内での類似する存在様態は、ブルーストにおける、循環における生 *vie* の理解を表わしている³⁶⁾。それは、＜変容をはらむ循環＞であり、以下の表現にも、見られるものである。「不幸の限りを与えてくれるこのオデットが彼にとっていとしくなくなったのではない。それどころか、苦痛が増すにつれて、彼女だけが持っていた鎮痛剤や解毒剤の価値も同時に増すように、より大切なものとなったのだ (I, 357)」。生を与える＜モノ＞と死を与える＜モノ＞の一致とは、自らを消費して他者に向かう力が＜世界＞の循環する力動性に参与することでもある。このことは、「⑨循環」において再び考える。

ブルーストは、連鎖の循環を生きながらも、その探求 (*recherche*) から逃げることを選ぶスワンを示唆するに留める。たとえば、オデットが彼に語ることの真偽がわからないまままで自問するスワンは、自分とオデットの関係図を定められずに、「この問題を自分に問うてみた。しかしそれも長い間ではなかった。というのは、彼もまた困難な問題に直面すると、父親譲りのあの精神鈍麻に陥る質だったからだ」(I, 238) と解説される。そうすると、存在の美学とは意志の問題、持続の問題なのだと理解できる。考え続けるために必要な言葉とはどんなものなのかを、私たちは考え続けねばならない。

⑧分割の「レトリック」

スワンのオデットに対する嫉妬心は、物理的連鎖から観念の連鎖としてある世界のあり方にそって様々な形をみせる。まず、オデットから投函するようにと託された彼の恋敵への封筒を手にするスワンである。彼女が心配することもなくそれを託したことに、スワンは悲しさと当惑と、しかし嬉しさを同時に覚える。そのうち、「封筒の透きとおる窓ごしに、とうてい知るすべもないと思った出来事の秘密とともに、オデットの生活のほんのわずかが (…)彼に暴露された」と感じたとき、「彼の嫉妬心は、養分になるものなら何でも、たとえスワン自身を犠牲にしてでもむさぼりとりといった独立した利己的な生命力をもっているかのように、暴かれたものを楽しむのだった (I, 278)」。

視覚の不透明さは、方向のない意味をただ予感として生んでいるのだが、やがて意味の連鎖は、物語構築の自動性を帯びていく。

彼は初めは、オデットの生活のすべてに嫉妬したわけではなく、おそらく誤解した状況において、オデットが騙したのだと思わされた場合にだけ嫉妬を覚えたのだった。彼の嫉妬心は、第一第二第三と触手をのばす蛸のように、この夕方五時という時刻に、ついでまたほかの時刻に、それからさらに他の時刻にぴったりと絡みついた。(I, 279)

このように嫉妬に苦しむスワンであるが、彼は感情が誘導する物語構築の自動性にも介入する。すなわちスワンは、

この観点に再び戻った。——それは、恋と嫉妬の観点とは対極にあり、そこに彼は時に、一種の知的公正さからさまざまな可能性を考慮に入れるために身をおいたのだが——そこから彼はオデットを、彼が愛してはこなかったかのように、また、彼女が彼にとって他とかわらぬ女性であるかのように、また、オデットの生活が、彼がいなくなるとすぐに別のものになったり、彼に対してこっそりと企まれる陰謀などではないかのように、そんなふうに判断しようと努めた。(I, 298)

この引用文の意味作用は、固有名詞オデットの前に、une, l'autre, cette (I, 297) (…時のオデット、別のオデット、…ているオデット、このオデット) といった冠詞や指示形容詞を同一文脈内に用いる場合と同様の意味作用を生じさせている³⁷⁾。だがその場合は、同一でいて多の他者の意味づけが単に並列されるのに対して、この引用文には、知的な欺瞞がある。別の例では、オデットの悪評を耳にしたスワンであり、そういうオデットを自分との関係において受け入れることはできない彼の反応である。「ニースでは誰でも、オデット・ド・クレシーとは何者なのかを知っているとはどういうことなんだろう？ ああいった評判は本当だとしても、他人の考えで作られたものなんだ」と自問する彼は、「この風聞は、たとえ本当だとしても、オデットの外部にあるのであって、彼女の内にどうしようもなく有害な個性 (une personnalité) としてあるわけではない (I, 308)」とし、「悪事へと誘われることもあった存在 (créature) かもしれないが、やさしい眼と、苦しみへの哀れみを深く知る女 (femme) で、彼が腕に抱き、抱き締めてはしたいようにした肉体を持つ女であり、いつかは、彼が彼女にとって不可欠となれば、そのすべてを所有できる女なのだ (I, 308)」と考える。スワンにおいてオデットは、personnalité, créature から femme へと呼称をかえて捉えられる。オデットという生身の人間の、スワンにとっての対応様態の種別が、まさにシネクドック用法による意味の伸縮と拡大を媒介として次々ととらえられ、彼に所有可能性を信じさせていく。このように＜分割＞の知の罫にはまったスワンであるが、彼に対応するオデットもまた、断片をもてあそび、スワンを悩ませる。

たとえば彼女が嘘を語りつつ、その物語の構成に、一部の真実を入れた時のことである。

スワンはたちまちこの話に正確な事実の断片の一つを認めた。それは不意をつかれた嘘つきが、考えついた虚偽の事件の組合せの中へ、その虚偽とひとつになって「真実」との類似をそこでかすめとらせようとして挿し入れては安心しようとする、あの事実の断片のひとつである。(…) 彼女にしてみれば、これは本物の断片なので嘘の断片ほどの危険はないはずだから、結局はこのほうがいいのだと自身に言い聞かせながら、それ自体では重要ではない断片を出来事のなかから引き抜いたのだ。(…) これは彼女の思い違いで、これが彼女を裏切った。こうした本物の断片にはいくつもの角があり、それらは、彼女が勝手にそこから抜き出してきた元の真の事実の連続する細部においてしかはまりこまないもの

であって、その真実の一断片を彼女が差し入れたいろんな作り物の細部がどんなものであるにせよ、その作り物の細部は、はみ出した部分や埋められなかった空隙によってつねにばれてくるのであって、この真実の一断片がはまりこむ位置は、彼女の考えだした嘘のあいだではないということなのだ。(I, 273-4)

<現実>は破片の寄せ集めでありながら、食い違いを摘発する厳格さをも持つ。だが、引用文が与える幾何学的イメージは、<本物>や<事実>が駒となるゲームを思わせるにしても、このゲームにはルールがない。オデットの策略は失敗に帰する。

一方のスワンはある日、得体の知れないオデットの[・]本[・]心[・]をさぐることに疲れはて、彼女に、「もうあなたを愛するのをよそうかという気に自分になるのは、あなたが嘘をつくのをやめようとしなからだ」と言いだして、その決意の[・]妥[・]当[・]性[・]を説明して以下のように言う。「単に愛嬌という点から考えても(…)嘘をつくことで品をさげて、どんなに自分の魅力をなくすかということが、あなたには分からない?(…)まったく、思っていたほど賢くないね、あなたは！」(I, 286)」。オデットという記号のメトニミー化のたやすさを享受し、そしてまた苦しむスワンは、今度は客観的[・]事[・]実[・]のメトニミー構造の堅牢さに賭ける。しかしオデットは、詮索するスワンに対して、体系に対する孤立的な事実、または例外、そして偶然としてあるのであって、オデットに、嘘のつけない理由をすっかり説明しても無駄だった。なぜなら、「そうした理由は、オデットが嘘の広汎な体系をそなえているのなら、その組織をこわしてしまうことになったかもしれない。しかしオデットはそうした体系をもってはいなかった(I, 286)」からだ。

こうしてスワンは、彼が期待し予想する対応を見せはしないオデットとの関係において、最悪の一人芝居を演じることになる。つまり、「オデットが嘘をついていると信じるには、前もって疑いを持つことが必要な条件だったし、また十分な条件でもあった(I, 292)」という結果において、スワンは、考えまいとすることが考えることとなる自意識の循環に陥る。自身の感情が馴染む客観的な事態を把握したいと欲して、スワンは因果を判断する位置感覚を失ってしまった。「知恵のもっとも明白な印は、常に変わらぬ喜悦³⁸⁾」であるとするなら、スワンの知恵は実に陰鬱である。

そして、その知恵が及ばない地点にこそ、事実の、そして真実の痕跡は印されている。ここから私たちは、世界の連鎖の動きの第2の形、つまり、誰にでも近づけるわけではない間接的な探求の道のりを見ていくことになる。すなわち、「彼女はしゃべり続けた。彼は彼女をさえぎらなかった」

彼女が彼に語る言葉、それは聖なるヴェールのように現実の痕跡を漠然ととどめ、限りもなく貴重で、しかも悲しいことに見つけがたいその現実(réalité)の、はっきりしない手本(modèle)を描いているように感じられる(なぜならまさに、彼女は彼に話しながら、現実を言葉の後に隠していたのだから)のだったが、彼はその言葉を熱心な、しかも苦痛にみちた敬虔の念をもって寄せ集めるのだった。——彼がさっき3時にやって来たときに

彼女がしていたこと——その現実からは、彼は読み取りがたく崇高な名残である虚偽しか所有しないだろうし、そして、その現実、その値打ちを知らないで眺めてはいても譲り渡そうとはしない人間の隠匿という記憶においてしか、もはや存在しないのだ。(I, 274)

ここには関わりの必然という一元性、すなわち共有された＜事実＞、そして人間の＜事実＞であり、プルーストが捉える多元・多層性としての＜事実＞が示唆されている。他者の内に＜事実＞を欲望する者は、そのように欲望するゆえに、手本として畏れつつ感知しながらも、しかし決して届きえない現実の手本に憧れることしかできず、その人物によってそこにしかないものとして欲望される＜事実＞を所有する者は、その＜事実＞の価値をそれを求める人物ほどには知ることにはない。所有された事実は、世界の連鎖のなかにいったん相対的に吸収される。＜生きたこと・失ったこと＞を求める意識が得るのは、隠匿という記憶に重なる、「真実のかすかな指標でありうる何らかの虚偽」(quelque mensonge qui serait un faible indice de la vérité (I, 274)、「崇高な名残である虚偽」なのである。

⑨循環

オデットの語りの見せ掛けや口実をスワンが表面上は見抜くにしても、二人が個々に生きる脈絡での、そうでしかない二人の＜事実＞を、離れた地点から語る文章がある。

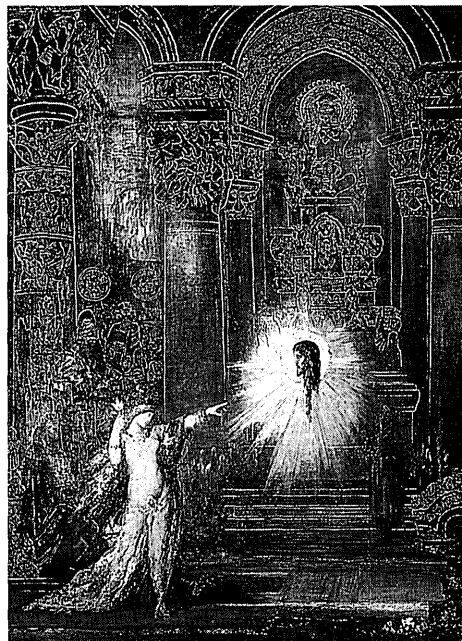
スワンが乗り切ろうとしている危機のさまざまな局面を彼女は思い描いてみようとはしなかったし、たとえそれに思い及んだときにも、その仕組みを理解してみようとはせずに、自分が前から知っているもの、必然で間違いのない、そしていつも同じ終わり方(terminaison)³⁹⁾しか信じなかった。それはスワンの観点から判断すれば不完全な——それだけおそらくは一層深い——考えであるが、スワンならたしかに、自分はオデットに理解されていないと考えるところである。(I, 302)

ここには人間関係の深刻さと軽薄さが、オデットの思考・言語使用の機械性として、まず表現されている。すなわち彼女の内的な思考は、文法用語である語尾(terminaison)を＜終わり方＞の意味で用いることで表わされる。一つしかない規則としての終わり方をそれぞれの語尾が見せるように、言葉の論理に内在する機械性に操られる人間は、理解するという行為において自由ではないことが示唆される。機能の惰性としての言語に、彼女の思考は身を明け渡す。このオデットの思考の被操作性を、しかしプルーストは、「不完全な、それだけおそらく一層深く」、それでいて両者の関係としてスワンから見れば「理解されていない」ととらえうる。人間という解釈対象がになう因果と、その解釈行為は循環しながら、異なる地点において異なる＜事実＞を見せる。そこに生きる言語表現は、線状、平面上に機能する論理性ではなく、語の肉体性の厚みを持ち、その半透明性と深さにおいて、それと一致する事実の空間を捉えるものであるはずだ。それは、視点を選ばないオデットの世界も、視点に迷うスワンもともにいる立

体性をそなえた場所を構成する。その立体性は、スワンという昨中人物が他の人物にたいして、停止した（完了した）判断をするとき、物語内の人物たちの間の動きが始まるという、強力な物語性（循環）を提出する。停止する判断（完了性）が、物語のエネルギー（継続・引継ぎ）の未完了性と一体であるというのが、ブルーストの描く物語世界である。

以下の引用文は、スワンがオデットとの関わりを独話するものである。他者との関係を一方が独話において捉えることには、異様な暴力性・権力性が一般的に見られるものだ。オデットはサロン娼婦としての過去において、複数の愛人を持った。スワンとの関係が始まったあとも、彼女にはスワンに隠している生活があると思わせる。この事態はスワンにおいて、オデットの暗い背景を支配する情熱を育てている。一方、彼女は金に困り負債を持ち、彼に助けを求めることがよくあり、彼にはそれが嬉しかった。

そういうわけで、スワンは、知り合ってしばらくして後より、オデットにたびたびお金を送りつつも、そうすることで彼女を囲っていることになるとは一度も考えたことがなかった。そしてある日、「オデットとお金」に関しての独話にいたる。まずスワンは、オデットに関する噂、そして「囲い女」という「言葉」を思い出す。G. モローの絵⁴⁰が浮かび、そういう女性への哀れみが喚起され、オデットの顔の上に、不幸な者への哀れみの、そして不正への怒りの、さらに親切への感謝の感情が通り過ぎるのを見てスワンは楽しむ。スワンの暗い支配欲が物語を紡いでいる。囲い女、コレクション、債券、銀行家、金、送金へと彼の連想はつながる。



『出現』 G. モロー
(1875年)

その時、突然に、彼は自身に問い掛けた、これは、これこそまさに彼女を「囲う」ことではないのかと（あたかも「囲う」というこの観念が、実際のところ、秘密めいても邪悪でもない要素から引き出され、まるで身近に使い慣れた、破れたのを張り合わせたこの千フ

ラン札のように、彼の日常の私的な生活の基底に属しているかのように、その千フラン札は彼の召使が、その月の勘定と家賃とを支払った後でスワンの古い事務机の引き出しに押し込んでおいたもので、それをスワンは取り出して、さらに四枚を添えてオデットに送ったのであった)、そして彼はまたこうも自問した、自分が彼女を知るようになってからは(というのは、彼女がスワン以前に誰かからお金を受け取っていたとは、彼は一瞬たりとも考えなかったから)、それまで彼女とはとてもあい容れないと思っていたこの「囲い女」という言葉を、オデットに当てはめてもいいのではないかと。 (I, 264) ⁴¹⁾

ここでは、殆ど無反省的な日常の思いが、対人モラルそのものとして表出されている。この引用テキストであるが、() による2ヶ所の長い挿入部分を除くと、下線部のみの単純な構文となる。それが、この文の主メッセージ、すなわち、スワンによる<事実>認定の2度にわたる単純な表明であり、残りは、このメッセージを語るのを支える感情的表出である。主メッセージをはっきりと言え、「私はあなたを囲っている」、「あなたは私の囲い女だ」であるが、それをスワンは、オデットを相手に音声化、つまり外化しえない。そして、この内的発話(下線部)が帯びる無意識的な恐れは、2ヶ所の() 内の表現が持つ迂回を必要とした。

オデットの価値は、部分的な視野(思考回路) ⁴²⁾によって分断され、そのあり方は、文法的な運びそのものとなっている。ここでスワンが見せるのは、物が媒介する関係と同時に、思惟の相関を把握することなく、介在する物の相関関係に対応する心理へと分割された判断をつぎつぎと自明として推論していくときに人が陥るモラルの墮落である。行為と、そこに介在する道具の安易な混同の愚を、この文は暴きだしている。

スワンが見せる人間支配という深刻な問題の安易な扱いは、(日常的な)具体物を媒介にすることでなされたが、その野卑な軽率さは、実は彼が、洗練されてもいれば、たやすく納得もしないと自らに自負していると思える知性の安易さである。その自認の持つ押しの強さに対するのが、「生で粗野な、分化を知らない、原始性」 ⁴³⁾のオデットだ。上記のスワンの引用が独話でありつつ、すでに対話になっているのは、その最終部に付加しうる「*n'est-ce pas* (ではないのか?)」には、<モノ>としての他者オデットに対して無意識にむける無効な侮りに頼らざるをえないという、関係の手応えのなさ由来する不安にスワンのこの独話が発しているからである。「事物とは能動的な認識作用の向けられる受動性の世界であるが、その受動性の全体的なあり方は、認識する者としての私たちが近づけるものではない」 ⁴⁴⁾。スワンはここで、オデットとの関係を言いあてる言葉を、自身の脈絡において捜し出したのだが、その行為は、二人称を主語とするあらゆる発話と同形の迂闊さを示す。つまり、そういった形で最も単純でいて暴力的なのが、事物に対して人間が安心して用いる「これは…だ」に倣った「主語(二人称)・連繫動詞(*être*)・属詞(形容詞・名詞)」であり、例えば、「あなたは(…)だ」である。属詞にはあらゆる語が入りえるのであって、そこに潜む、発話者が自身の脈絡を脱しえないで持ち出す他者との関係性の定義は、部分的には正しく、全体では間違えることになる。

『男女関係における貨幣の役割』と題された、まさに男女関係の契約事情を論じるジンメル

は、「人は、なにか実質的な物を与えるのではなく、金を与えることで、ある関係からより簡単にさっぱりと手を切ることができる。(…)貨幣だけが、売春にふさわしい対価である。(…)金を払うことで、どんなこととでも徹底的に手を切ることができる⁴⁵⁾」とし、一方でブルーストは言う、「非物質的な感覚の享受者として、結局彼が払っている代価が、彼にとって（恋をしているという）逸楽の価値を高めた。金を払うという代償が、逸楽の価値を増した(I, 263)」と。情と感覚が介在する関係において金を与えることで自らに課す犠牲（大きな出費）の痛みを価値観へと転化することは、清算済みの優位感覚を、意識下での負い目（割りきれなさ）と対応させるのであり、支払いが担わされる法外な心理的な広がり（暗さ）によって、瞬時に（そしてあらかじめ）報復（敗北感）を受けるともいえるだろう。

ブルジョワ社会の思考形式においては、金銭や社会的威信は媒介的なものではなく、絶対的な価値になるとされる。ところがその＜価値＞とは、無限のずれのプロセスにほかならない。「価値の概念は、因果性のように、無限後退を自己のうちに含むだけではない。それに加えて、悪循環をも含むように思われる。なぜなら、現象の結合をかなりの程度まで追っていくと、Aの価値は、Bの価値に基づいているが、しかしまたBの価値はAの価値だけに基づいていることがわかるから⁴⁷⁾」である。ブルジョワ的俗物根性は、いずれにせよ、置き換えては解釈し、対象を飼い慣らして安心しようとする。スワンが渡す貨幣は、スワンという存在の痕跡を帯びることはいままで、外観の磨耗にもかかわらず交換価値を持ち、はやばやと他の有用な＜物＞にオデットによって代えられるだろう。ブルジョワの金、権力の実体化と、メトニミーとシネクドックの機能の実体化は相似する。オデットが送金主のスワンを＜モノ＞との交換によって相対化する一方、スワンの満たされない思いの痛みは、2重（2倍）に原因に執着する。

スワンがここでオデットに対して行なっているのは、彼女に対する彼の権利の主張、（彼個人の自己主張）であり、そこには、自身の価値の意識と同様に、私的、主観的となった正しさが主張されている⁴⁸⁾。スワンにおいて、分割されたモラルに関わる自らを自明とする判断は、文法的には、ce cette という、予断をもって発話者が規定した内容を付与する指示詞によって示される。「（囲うという）この観念」、「この百フラン札」、「この（囲い女という）語」という3指示形容詞は、些末な具体性の集合をさすとされる＜観念＞のあり方を、日常的な紙幣の手触りと一致させる。

この引用文に関して指摘した文法の特徴は、野内がシネクドックに指摘する2つの主要な役目と重なる。つまり、一見相反する性質を帯びているところの、一般化（括り）と特殊化（挙列）の働きのである⁴⁹⁾。前者は類のシネクドック、後者は種のシネクドックが担う。この両者の表現を支えるのは、経済性と叙情性である。一般化を支えとして自己の特殊を示す経済性と、特定化しないことによる余白の表現効果に似た叙情性は、このスワンの自問の形に集約されている。また、（総括的な用法の）定冠詞（その、くだんの、というもの）の基底にも、シネクドック的な発想が指摘されるが⁵⁰⁾、スワンにおいては、抵抗のない指示形容詞の用法に、それが見られる。

スワンとオデットの二人は対称的な関係にはなく、送金行為の契約を履行しつつ、それが、

感情に相関しない不安（不満）を、スワンは日常的な仕草のなかで独話において解消し納得しようとした。日常的なものとなった行為の意味作用は、それ自体で充足し完了する。こうして、このテキストは、貨幣を媒介とした占有欲を体現する言説の、考えうる最も軽薄な吐露の一つとなっている。そして、その思いの言語化は途中で放棄される。例の精神鈍摩である。上記の引用文は以下のように続く。

彼にはこの考えを突き進めることはできなかった。というのは、電灯設備がいたる所につけられた後のように、スイッチ一つで家中の電気が消せたように、瞬間的に、彼にあっては生れつきの、間歇的で宿命的なあの精神の怠慢の発作が、この時、彼の知性のすべての光を消したからである。暗闇のなかで彼の思考は一瞬手探りする。彼は眼鏡をとってレンズを拭き、目の前に手をかざす。(I, 264)

スワンの心の陰りは、レンズという物品の物理的な陰りの処置に移されて、もはや顧みられることはない。思考（言語使用）は、その行為自体を保留された。オデットの存在が被った他人による把握は、彼女の生の力の略取であるが、オデットの力は反動として、『スワンの恋』の最終部では、スワンの咏嘆となる。

中途半端の論理（自己問答・否定疑問）でオデットとの関係を捉えようとしたスワンであるが、オデットという他者性に翻弄された不可解を、『スワンの恋』の最終部では、以下のような咏嘆においてみせることになる。「人生の数年を無駄にしたなんて、死にたいと思ったなんて、最大の恋をしたなんて、気にもいらず、好みでもない女のために！(I, 375)」スワンはここで、二人の間にありえた関係に愕然とする。そして、自らに発したところの力に振り回されたことを驚嘆をもって追認する。彼は「生きたこと」を認めたのであって、問題は理性と情念の分裂による不安感やアイデンティティの崩壊への危機感といった角度で論じられはしない。金銭の授受において暴れた二人の関係（物語）は、まさに、「実体的思考は終わった」とするジンメルが『貨幣の哲学』で述べる＜運動＞として、しかし、個々において、分割された切実な生の運動として、担い手が次々とずれていくような運動として理解される。「現象は、もはや特定の実体を通して、ないし特定の実体として理解されるのではない。現象は、運動として、しかも、その担い手がつぎつぎと無性格的なものへとずれていくような運動として理解される⁴⁶⁾」。物語の帰結部で発せられる上記の＜自己知＞の虚妄を負う咏嘆は、オデットを囲い女と名指すスワンを描く上記の引用におけるスワンの中途半端に装われた優越感がずれた動きであり、「失いつつ生きる」形の表現としてある⁵¹⁾。

⑩実空間の＜非現実＞から、虚空間の＜現実＞へ

物語の筋としては、高級娼婦の過去を持つオデットは、その複雑な過去がほのめかされつつも、ユダヤ人のブルジョワであるスワンの死後はフォルシュヴィル侯爵と再婚する。さらには、一貫して『失われた時を求めて』において貴族界の象徴としてパリ社交界に君臨するゲルマン

ト公爵の愛人となる。彼女の魅力は失われることはない。自己表出においても詠嘆・独白を聞かせることはない人物として彼女は構成されている。彼女は失った言葉の奪還をはかることもない。

その彼女にとまどうスワンと、語り手との類似に関しては、「全く別の部分において、彼が見せる私の性格との類似のゆえに、私は彼の性格に関心を持ちはじめ (I, 193-4)」ともあるが、スワンと語り手の接点で機能するのは失敗・過失 (erreurs)、しかも心惹かれる・魅力的な (charmantes) 失敗・過失である⁵²⁾。「まれに見る繊細さでおぎなわれてはいたが、スワンには、やや下品なところがあった (I, 190)」という不調和も、変転をはらむ運動としての心惹かれる失敗の一例である。

同様に、先に述べた、「生れながらの病的なスノビズム」をもつカンブルメール若夫人であるが、彼女のうちにますます昂じていたこのスノビズムは、以下のように叙述される。

(このスノビズムは)、若いころの彼女がもっていた吝嗇や不倫へのいくつかの傾きを治してしまっており、その点でこれは、ある種の奇妙な恒常的な症状に似ていたのだが、こういった症状にはまると、ほかの病気に対して免疫になるらしい症状である。(III, 315-6)

「病的なスノビズム」は、倫理としての価値においてではなく、物理的・空間的なエネルギーとして問題とされており、そこには、積極性と制御は一体となる動きがある。先に述べたカンブルメール若夫人のリアリズム芸術の理解であるが、彼女は、「みすばらしすぎて画家や作家のモデルとなるのにふさわしくないといったような対象は一つもない」ということと同時に、「トルストイの描く農奴やミレーの描く農民は、芸術家がそれを越えてはならない社会的な極限だ」と信じていた。彼女のこの対応は、十全に生き、自由であることの多大な責任への恐怖からの意志のたじろぎ⁵³⁾ともいえる。積極性と制御は、生きうる総体としての混成体を求めて相関するのだが、さらには、互いを必要とする。それは例えば、嫉妬のあり方に見られる。嫉妬の治療は、人が恐れているものの確信である⁵⁴⁾という奇妙さにおいて、〈生と死〉の一体性と循環を体現しているのだ。身体に生命が宿るように、「言葉は、これを特定の個所に局在できるように独自の器官を持たない機能として現われる⁵⁵⁾」のであって、言語の意味作用は、身体の〈生〉の均衡のイマージュをなぞって成立する。

例えば、オデットに関わる中傷の匿名の手紙を受け取ったスワンである。彼はその内容を完全には理解したくはない。その結果、「匿名の手紙を読んで、彼の知性には仮定が導き入れられたが、それは機械的になされた。その仮定は、理知においては、どんな信任 (créance)⁵⁶⁾も受けなかったが、そこに実際そのままどまり」、スワンは、「こうした疑惑のまったく物質的な、しかし厄介な存在」を意識する (I, 363)。ここでは、知性の種々の運用法を踏んだ最終段階にあるものとして、「信任 créance」という、文語では信用・信頼を意味するにしても、日常用語からは逸れる専門用語を用い、その固有の作用において、理知には消化できない「物

質的な疑惑」を設定することで、文意の成立にずれをはらませつつ、＜ヒト＞が＜コト＞を為していく段階的な過程が描かれている。

そこでは、人が＜コト＞を為す行為の受動、能動の区別は定かではなくなる。それが、魅惑に应えてさ迷い出る動きの形ではないか。つまり、＜コト＞が形を取ろうとする動きに引かれて＜私＞が自発性を誘われるのだ。それが、生命の第一歩であり、人が心惹かれる・魅力的な失敗に至るのは、*erreur*（失敗）につながる *errer*（動詞：さ迷う）という動きは、魅せられ続けるかぎり続いていくものだからだ。そこに自ずからなる自発性があることは、その対極にある、流れるままに身をゆだねる怠慢なあり方を見るとわかるだろう。その敗北主義の時間論は、スワンのある時期の姿勢として、いささかの躊躇を潜ませて以下のように語られる。すなわち、「若い頃の知的信念を弱めるに任せ、気づかない間に、社交人としての懷疑主義がこの信念に沁み渡るままにしたスワンは、人の趣味の対象は、それ自体においては絶対的な価値は持たず、すべては時代の問題、階級の問題であり、流行のなかにあるのであるから、そのなかの最も俗なもの、もっとも洗練されているとされる流行に値すると考えていた。あるいは、すくなくとも長いあいだそう考えていたので、あいかわらず、やはりそう口にしていた (I, 243)」。

その姿勢には、心惹かれ、魅せられるゆえの間違ひはありえない。しかしそのスワンにしても、魅惑の中に取りこまれることにおいて悔いを知る経験を持つ。スワンがオデットとともに、ヴァントユイユのソナタを聞いたときのことだ。

ゆったりしたリズムで、楽節はスワンをここに、そしてあちらにと導き、さらに、気高く、理解をこえた、そして明確な幸福にむかって彼を連れていった (I, 207)。小楽節はあらわれた、踊りながら、牧歌的に、挿入されたエピソードのように、ある別の世界に属していた。(…) この楽節が彼らのごく近くを、しかし無限に通り過ぎていった時、この楽節が彼らに語りかけながら、それは彼らを知らないのだと考えてスワンは苦しかった。彼はそれが、ある意味を持っていること、そして彼らに無関係な、内在的で固定した美を持っていることを悔やみさえした (I, 215)。

スワンは、ある存在体に、まるで嫉妬しているかのようだ。私たちには、「眼には見えない現実のひとつの現存 (*la présence d'une de ces réalités invisibles* (I, 208))」に自らがつながると感じる時がある。それと一体となるのは、魅力的なものが、生の魅惑に向かって失敗の域にまで人をさ迷わせる深さを探求 (*recherche*)⁵⁷⁾ とすることにおいてである。そこでは、受動が能動になり、さ迷いつづける力は覚醒の力となり、語られるべき＜生＞のはらむ時差と視点の変転が引き入れられ、失敗・過失 (*erreur*) は自らを問い語るべき言葉を探索する。

オデットが弾くまづいピアノを聞きながらの但し書きつきであり、また、演奏される曲中でとくにスワンを引きつける小楽節は、彼がオデットに抱いていた恋とひとつに溶けているのだが、「ある作品の最も美しい幻影というものは、往々にして、調子はずれの音を越えて経ち現れる幻影なのだ」とブルーストはして、「そのために私たちが作られてはいない世界との接触

の喜び」を語る。そこでは、きわめて狭く個的なものが、ある普遍性を垣間見させる。「その世界は、私たちの眼が捉えられないゆえに形がないように見え、私たちの知性から逃れざるゆえに意味がないように思える (I, 233)」ものだ。

音楽が彼に与えた喜び、やがて彼のなかに真実の欲望を生み出そうとしていた喜びは、そういう瞬間には、種々の香水を試したときに持つような喜びに似ていた。(…) 人類とは無関係な被造物、盲目で論理の力を奪われた被造物、ほとんど空想上の一角獣にも似て、ただ聴覚によって世界を認知する架空の被造物に変身させられたと自分を感じることは、スワンにとって大きな休息であり、神秘的な生まれ変わりであった。(I, 233-4)

放棄と委託、それを心得ていることの<知>と敏捷さが求められる。この考えに相似するイメージが、<スワンの恋>について語られている。

因果の働きは、ほとんどすべての可能な結果をいつかは生み出すことになるが、その結果、可能性がまったくないと思えた結果をも生み出すのだが、その働きは時に緩慢であって、それを早めようとして邪魔をしてしまう私たちの欲望によって、また、私たちの生存によってすらも、少しはさらに緩慢になるのであり、この働きは結局、私たちが望むことを終えた時、そして時には、生きることを終えた時でなければ実現しない。スワンはこのことを、彼自身の経験によって知っていたのではなかったろうか。そしてそのことは、すでに彼の生 (vie) における、死後に起こるべきことの前兆として、あのオデット、彼が激しく愛したあのオデット、——たとえ最初に見たときには彼に気にいらなかったにしても——しかも、もはや彼女を愛さなくなってから、そして、オデットとともに全生涯を生きることをあんなに望み、あんなに必死になった人間がスワンのなかで死んでしまったときに結婚したあのオデット、あのオデットとの結婚という、死後の一つの幸福ではなかったろうか。(I, 462-3)

モンテーニュの『エッセー』の第19章は、「われわれの幸福は死後でなければ判断してはならぬこと⁵⁸⁾」と題されている。それは「死に方」を問う考え方であり、他のすべての日々を裁く日として最後の日があるとするものだ。しかしブルーストのこの論は、死後に判断する幸福論の可能性を示唆しているともとれる。「死後の一つの幸福」とは、スワンにおいて、3 様の vie が瞬間内に循環する形である。それは生命の日々が人生となる動きそのものとしての生である。生のただ中での死後の幸福を捉える<知>とは、一種のメトニミーの流れの中に、<時間>の循環をみるものだ。

ロラン・バルトのコレージュ・ド・フランスでの開講講義は、言説に潜む権力 (支配欲) を暴くものであるが、講義は以下のような、祈りにも似た詠嘆で結ばれている。

叡知とは、どんな権力をも持つことなく、少しの知、少しの知恵、そして可能なかぎり多くの味わいを持つものである。*Sapientia: nul pouvoir, un peu de savoir, un peu de sagesse, et le plus de saveur possible.* ⁵⁹⁾

味わい *saveur* は、すべてを語りながら、＜在るもの＞の部分でも延長でもない。「死後の幸福論」は、スワンへの鎮魂歌として、*saveur* に焦点をあてて生を考える、一つの人間讃歌ともいえるだろう。

注

Marcel Proust, *A la recherche du temps perdu*, nouvelle édition de la Pléiade, Gallimard よりの引用は、巻数 I (1987), II (1988), III (1988), IV (1989) と頁数で印す。日本語訳は、『失われた時を求めて』市原豊太、井上究一郎、中村真一郎訳、新潮社、および、鈴木道彦訳、集英社、1997年を参照した。

- 1) メトニミー（換喩）とシネクドック（提喩）の定義は混乱している。ヤコブソンの隠喩－換喩の二元論、さらに、換喩と提喩の両者の間に違いを認めず、前者が後者を含むとする考えもある。さらに、転義の比喩（trope）を二つの大きなクラスにまとめ、一方をメタファー、他方をメトニミーとシネクドックとし、さらにメタファーとメトニミーは、さまざまなタイプのシネクドックの組合せによって得られる複合的な文彩であるとする考え（グループ μ、『一般修辞学』1970年）もある。

文献：佐藤信夫『レトリック感覚』、講談社、1978年、121－8頁。

野内良三『レトリック辞典』、国書刊行会、1998年、71－92頁。

瀬戸賢一『レトリックの宇宙』、海鳴社、1986年、48－56頁。

N. リュヴェ「提喩と換喩」青山訳、（『創造のレトリック』勁草書房、1986年）。

そこで、大雑把であるが、前者を隣接、後者を包摂・部分の原理に基づくとしたい。これらの機能は、現実的・物理関係においても、観念の関係においても機能する。隣接の意味の広さを理解するために、デュマルセによるメトニミー（換喩）の8種類のタイプを、以下に引用する（野内、前掲書、74頁に引用）。

- | | |
|-------------|--------------|
| 1) 原因によって結果 | 2) 結果によって原因 |
| 3) 容器で中味 | 4) 産地で産物 |
| 5) 記号で物 | 6) 抽象名で具象物 |
| 7) 身体の一部で感情 | 8) 家の主人の名前で家 |
| 9) 前件で後件 | 10) 後件で前件 |

この他、「材料によって製品」がある。

シネクドックは、二つの事物が、全体と部分、類と種、一般名称と固有名などの関係にある時、一方を表現するのに他方の語（句）を用いて、強い表現効果をあげようとする修辞法である。

- 2) スワンの魅力が「スワンの恋」において積極的に叙述される箇所は多くはない。たとえば、社交界に慣れているゆえの所作の「自然さ」が言われる一方、「まれにみる繊細さで補われていたが、彼にはすこし下品なところがあり」ともある。しかしその死後に位置づけて描かれる追憶のなかのスワンには、特殊な、いわゆる「香り（IV, 598－9）」がある。そこでは彼は、循環する時の媒介をはたす。長文（1パラグラフ、67行）の「スワンのポルトレ（I, 18－9）」では、彼は、「時」を描くことを可能とする媒介としての器（空間）として描かれる。参照：拙稿「＜同語反復＞と＜対義結合＞で描くスワンのポルトレ」神戸女学院大学論集、2000年7月、25－63頁。そのことは、スワンの生にひきつけて取りだされる言葉（*erreur charmante* 心惹かれる失敗）と関わっている。これについては、本稿の後半において論じる。

スワンを嫉妬で悩ませたオデットであるが、スワンの死後、以下のように語る。「可哀相なシャルル、彼は本当に知的で魅力的で、まさにわたし好みの男性だったわ（IV, 599－600）」。
それに対して語り手は言う、「それがどれだけ偽りであり、正直さにも嘘が混ざっていることを私は知っていた」。

つまり、メッセージ自体の嘘の一方、彼女の情報の捉え方（与え方）がまちがっているとする。すなわち、彼女は語り手に「小説の材料を与えようとしたのだが、（…）彼女は思い間違っていた。彼女は、より無意識的に、そして私自身から発する動きに促されて、彼女から、彼女が気づかぬ間に、その生活の法則を引き出させていたという点で、思い間違っていた（IV, 599-600）」という。＜スワン（と）の恋＞を主体として生きたオデットであるが、彼女の「魅力的でわたし好みのシャルル」というメッセージは、二人の間の主観的事実でも客観的事実でもない。それは、＜生きること＞、＜認識し書きとめること＞、ひいては、＜書きとめられる内容を生きたと認識すること＞のずれを、語り手・作家・プルーストが見抜いた＜循環＞が言わしめた表現の形である。このことは、本稿の結論部で論じられる。

また、予定している「失われた発話を求めて（そのⅢ）」では、この＜循環＞の問題を、シャルリュスにおいて論じる。

- 3) 九鬼周造の仮説的偶然は、「ふたつの互いに独立した因果系列がたまたま出会って、一定の積極的関係をもつ」（『偶然性の問題』燈影舎）とする。
- 4) ディエゲーシス：物語の世界に属し、出来事を描く物語言説。現実性という錯覚を与えようとはしないで、要約し、言及し、またほのめかすことで喚起したり注釈を加えたりする。間接話法を用いる。発話行為の持つ写実的な特性を除いてしまう。J. ミイー『テキストの詩学』上西訳、行路社、1998年、98頁。
- 5) ミメシス（模倣、もしくは再現を意味する）：ディエゲーシスに対立する、可能な限り直接的な模倣に近づくものとしては、対話がある。さらに、直接話法、引用がある。現実性という錯覚を与える。ミイー、同上書、97頁。
- 6) ジョルジュ・ギュスドルフ『言葉』みすず書房、1969年、笹谷、入江訳、138頁。
- 7) 佐々木健一、『美学辞典』東京大学出版会、1995年、191-9頁。
- 8) G.H. ミード、『精神・自我・社会』人間の科学社、河村望訳、1995年、126頁。
- 9) 大山史朗、『山谷崖つぶち日記』TBSブリタニカ、2000年、176頁。
- 10) 同上書、176頁。また、エドワード＝グラント・アンドリュースは言う。「価値は、意見のように、哲学的に問うことや、市民的対話を経験することを通じて、教化され得るようなものでもない。意見には、教化された度合いの相違があるが、価値にあるのは、涵養されているか否か（cultured or uncultured）の相違である。」「『哲学と価値的思考』樋口克巳訳、『季刊 iichiko』, Autumn, 1997, No. 45, p. 38。
- 11) 参照：拙稿「失われた発話を求めて（その1）」、（神戸女学院大学論集、2000年12月、91-117頁）は、韜晦し、二重性を操る人物たちが生み出す状況としてのイロニーを、彼らの発話、描写、叙述において考察した。
- 12) スワンの恋愛における「意図性」にかかわる言葉が、『カイエⅠ』にある。『ユリイカ』、「欲望と挫折の軌跡」吉田城訳、1987年、p. 223。「ラ・ロシュフコーは言った、我々の初恋だけが無意志的であると。それは孤独の快樂についても同様である。のちにそれは女性の不在を誤魔化し、彼女が自分と一緒にいると想像するのに役立つばかりとなる。」
- 13) 作中の後のエピソードで言及される、スワン夫人となったオデットの対人関係のあり方を示唆する言葉使いである。それは、身分の高い夫人と語り手の祖母の避暑地での出会いを語るもので、前者は、妥当な対応態度をさがしあぐね、尊大と親しさの混ざった行為、すなわち、通り掛かりの物売りからパンを買い求めて、「これをお祖母さまにね」といってまだ少年である語り手にさしだす。「祖母は、スワン夫人のいわゆるベビーになっていた」（I, 59-60）とされる。
- 14) J.P. サルトル『サルトル全集第18巻』人文書院、1956年、157-8頁。
- 15) ジョン＝スチュアート・ミル（1806-1873）。イギリスの哲学者・経済学者。イギリス経験論を継承して帰納法を完成、実証的社会科学の理論を基礎づけ、また、功利主義の社会倫理説を説くとともに、経済学ではスミス・リカードを継ぎ、自由主義経済学の最後の代表者である。『広辞苑』新村出編、岩波書店、昭和58年。
- 16) ジュール・ラシュリエ（1832-1918）。博士論文である『帰納法の基礎』において、ラシュリエは、個々の事実や現象の認識から帰納によって普遍的で必然的な法則の知へと到るとはどういうことか、

を問題にする (314頁)。ブルーストと姻戚関係にあるベルクソンが、大学での専攻を数学から哲学に転じたことについては、ラシュリエの影響があるとされる。ベルクソンの『意識に直接与えられているものについての試論』は、ラシュリエに献呈されている (420頁)。『フランス哲学・思想事典』、弘文堂、小林、小林、坂部、松永編、1999年。

- 17) このことを現代の精神傾向と対比するとき、参考となる見方がある。ディズニーランド的な娯楽の効率性について、そのテーマパークとしての予測可能性の原理が、2000年3月8日の朝日新聞 (夕刊) では論じられている。「おなじみの物語、断片化したスリル、安全が保障されている冒険、驚く自分を演じる劇場性とその楽しみの質」である。「日本人は、このマニュアル化した、効率追求の装置にこそ、圧倒的な信頼を寄せてきた。徹底的な娯楽サービスと効率の良さがもたらした集客力、この完結した世界の安易さには、知も心も時間も、あらかじめセットで用意されている。」
- 18) 「広大な規模の社会現象が、人間の魂をより深く知る機会となるのではない。その反対に、個性 (individualité) の深みにおいてこそ、この社会現象を理解できる機会を得るとするべきだ (II, 626)。」
- 19) ギュスドルフは精神の試合といえる会話文化の歴史を語る。17世紀のフランスで、言語の純化に大きな役割を果たしたのは、アカデミーと社交生活だった。社交界が言語趣味の洗練に果たした役割は大きい、その行きすぎはプレシオジテ (気取り) の域に人々を引き込んだ。「会話は、それだけで一つのより優雅なスポーツ、(…) 更に《サロンの女王人》たちから、19世紀のヴェルデュラン家の貴婦人たちに至るまで、彼女らをめぐって繰り広げられる精神の試合となる。(…) 確かに優れた談話者となることは誰にも要求されるわけではなく、重要なのは、その中で目立つことができるということである」。ジョルジュ・ギュスドルフ『言葉』みすず書房、1969年、134-5頁。
- 20) Claudine Quémard, 《Les égoïsmes de l'amour chez Proust》. in *RHL* nos 5-6, 1971, p. 904。
ケマールは、スワンがオデットを望みはじめたのは、彼女を非実体化 *irréaliser* し、チッポラ (エテロの娘、ミケランジェロの描く女性像) と彼女を置き換えることに成功したときであったとする。「彼は自分の仕事机の上に、まるでオデットの写真のように、エテロの娘の複製を置いた。(…) エテロの娘の肉体を持った原型をスワンが知った今、(傑作へとわれわれを向わせる漠然とした共感) は一つの欲望となり、オデットの肉体によっては最初のうち刺激されなかった欲望を、今後は補うことになった。このボッティチェリを長いこと眺めたあと、彼は自分のボッティチェリのことを思い、その方がもっと美しいと考え、そしてチッポラの写真を引き寄せながら、オデットを胸に抱きしめているように思うのだった。(I, 221-2)」
- 21) ピエール・ブルデュー『ピエール・ブルデュー超領域の人間学』、加藤晴久訳、藤原書店、1990年、105-6頁、114頁。
- 22) 同上書、105頁
- 23) 佐藤信夫『わざとらしさのレトリック』講談社学術文庫、1994年、53-75頁。
- 24) 小林秀雄「様々な意匠」『Xへの手紙』角川書店、昭和29年、21-2頁。
- 25) 佐藤、前掲書、54頁。
- 26) 佐藤、同上書、54頁。
- 27) 佐藤、同上書、68頁。
- 28) 佐藤、同上書、75頁。
- 29) オデットには、アングリシズム (英語からの借用語) が見られる。たとえば、tea, smart, home, darling, gentleman である。彼女はスワンを smart な人だとウェルデュラン夫妻に紹介し、スワンが「やりきれない連中」のひとりではないかという懸念を彼らに与える。また彼女の手紙の筆跡は、「イギリスふうになぞと四角ばってみせているために、不揃いな字に規律らしいものがおしつけられているにしても、彼 (スワン) のようにひいき目に見るのでなければ、その字はだらしのない思考、教育の不足、率直さと意志の欠如、といったものを示していると映ったかもしれない (I, 218-9)」。スワンの恋敵でスワンの死後オデットと結婚するフォルシュヴィルも、単語 speech を用いる。英語の「音」は、外部からの別の価値のざわめきであり、挑発的な誘惑として響くようだ。
- 30) 以下は、『失われた時を求めて』鈴木道彦訳 (集英社、1997年) の訳注より引用させていただいた。
「現在のフォッシュ大通りは、開通した1854年から1870年までランペラトリス大通りと呼ばれ、第二帝

政期には大いに賑わった。この道は、エトワール広場からブローニュの森に通じており、ここから森の中にある湖を馬車で一周するのは、当時盛んにおこなわれた散策コースであった。エデン座は、オペラ座に近いブードロー街にあった劇場で、ワーグナーの『タンホイザー』のパリ初演は、ここで行なわれた。パリで「イポドローム競馬場」と呼ばれるのは、競馬、曲馬、サーカスなどを行なう一種の巨大な野外劇場で、1845年にエトワール広場の近くに作られたのが最初である。」

- 31) 野内、前掲書、77頁に引用。
- 32) 蓮実重彦『小説論＝批評論』、青土社、1988年、14－15頁。
- 33) 小林秀雄、前掲書、25頁。
- 34) 佐藤、前掲書、60頁。
- 35) 野内、前掲書、219頁。
- 36) 鈴木訳のこの箇所の訳注には、以下のようにある。『『死』というのはその前の『生きている恋』に対立し、『裏切り』infidélitéは『嫉妬の忠実さ』fidélité de sa jalousieに対立する。ここにはブルーストの基本的な人間理解があって、人は一定不変の連続した存在ではなく、たえず前の自分が死んで、異なった自分に生まれ変わると考えるのである。オデットへの恋も単一な一貫した愛情ではなく、つぎつぎと変わる無数の愛であり、ただ対象がオデットであるというにすぎない。これは、『私』を確固とした実体と考えるヨーロッパ近代の伝統にたいする、新しい人間観と言えるだろう。(455頁)』
- 37) 「cette image d'une Odette exécrée disant à Forcheville (...) le visage de l'autre Odette, de celle qui adressait ainsi un sourire à Forcheville (...) Alors à cette Odette—là (I, 297).あの憎らしいオデットの像はフォルシュヴィルに語りかけ (...) もう一人のオデットの顔が (...) フォルシュヴィルにはほほ笑みをなげかけている彼女が、 (...) そしてこのオデットに (...) (I, 297)」。参照：拙稿「＜病い＞と＜恋愛＞のディスクール」、神戸女学院大学『女性学評論』1999年3月。ここでは、(I, 263)のテキストが分析される。そこでは、嫉妬と不可分の自身の恋心を＜病い＞と認識するスワンが、＜彼女＞と＜病い＞の代名詞である elle に両者の意味を担わせて詠嘆し、「elle！」と叫ぶまでの思いの屈折が描かれている。

比喩が、視覚対象の観点移動によって生まれる例もある。「私の本能のみに従っていたときには、バルベックでは、クラゲは私を気味悪がらせた。しかし、ミシュレのように博物学や美学の観点からこれを眺めることができると、私は紺碧のうろわしい飾り燭台を目にしたのだ。クラゲは、透明なビロードのような花卉を持つ、海のモーヴ色の蘭ではないのか？」(Ⅲ、28)
- 38) モンテーニュ『エッセー』「子供の教育について」、原二郎訳、岩波文庫、1965年、305頁。
- 39) terminaison。ブルーストには、一般的ではない専門用語、すなわち、形どおりの所作と限定された環境にはめて初めて十全に意味作用をなす語である専門用語を、日常性の行為に用いる例が多く見られる。ここでも terminaison は本来は「語尾変化」を意味する語であり、その意味がもつ皮肉は、この文脈において普通の意味において使用が妥当な＜事の終わり方＞とはずれており、思考の機械性を強調することになる。言語と思考における、一般的な因果の優先性への皮肉ともいえる。他の例としては、critère (基準、目安) の代わりに、critérium (選抜競技『スポーツ用語』)の使用がある。
- 40) ギュスターヴ・モロー (1826－98年)。フランスの画家、文学的・神話的題材に幻想とやや退廃的な官能性をもりこみ、象徴的イメージを精細な描写で表現、象徴主義文学の登場に伴い大きく評価された。『マイバディア』平凡社、1990年、1414頁。『出現』、『サロメ』などでは、描かれる女性像は、誘惑、魅了、虜囚、相剋のテーマを喚起する。
- 41) Jean Belleman-Noël, *Vers l'inconscient du texte*, PUF は、スワンがその情熱の喪を、物語の末尾において見る夢において完成させるとして、この夢を分析している。スワンのこの引用文での独語は、情熱の「醒めてみる夢」ではないだろうか。

Marie-Claire Chatelard, *Le dernier cercle de l'enfer de Swann*, in *La jalousie*, sous la direction de Frédéric Monneyron, L'Harmattan (1996, p. 124) に引用された、ラブランシュ、ボンタリスによる fantasmes の定義を見よう。「空想されたシナリオであり、そこでは主体が防御的な手続きによってかなり歪められたやり方で、欲望の、そしてひいては無意識の欲望の完成を描く。」
- 42) Léo Spitzer, *Etudes de style*, Gallimard, 1970. p. 441.

- 43) 北川東子『ジンメル』講談社、1997年。ここで論じられるジンメルの『女性の心理学』(1890年)を、スワンとオデットの関係に重ねて読むことができる。ジンメルは指摘する。「即物性」とは、各部分を全体からもぎとり局所化することであり、進歩ではなく、「分化」にすぎないこと。「客観性」は、いくつかの対立する意見を拮抗させるという手続きを前提とするものであり、つまりは、葛藤と妥協の論理の産物にすぎないこと。そして、たとえ男たちが、独立した理論的な理想として「真理」を追い求めたとしても、いつでも女たちはそれを方便として用いるという実利性の世界が存在していること。したがって、「真理」は理論的な問題ではなく、規範的な問題であること。そしてそれにもかかわらず芸術作品のみに可能な「完璧さ」の理想を、女たちは体現しうること(110-112頁)。

44) 同上書、ジンメルの著作より、117頁に引用。

45) 同上書、144頁に引用。

46) 同上書、147頁に引用。

47) 同上書、148頁に引用。

- 48) エドワード・アンドリュースは「近代個人主義における道徳用語」として「権利 right、価値 value、コンシアンス conscience」をあげ、権利は「個人の選択を保障する機能」、価値は「その際の選択されたもの」、そしてコンシアンス(個人的判断、もしくは道徳的選択)は「こうした選択を聖化・是認する(sanctify)働き」と定義する。その根底に「自己の価値」の意識を秘めて、正しさ(right)ないしは正義(justice)が私的・主観的になって権利が生じるとする。エドワード・アンドリュース『季刊 iichiko』No. 45、19975-6頁。

また、ブルーストの書簡集を読んで、その言及の量的な多さに驚かされるのが、株式取引の問い合わせ、そして売買の指示である。第一次大戦下での日常的活動として、ブルーストは株式取引に熱心であった。そこでなされるのは、ギャンブルの危険よりは軽微な賭けとしての自己資産の運用であり、自己エネルギーが回帰することによる「自己」の確認行為である。そこには、文学活動と社会的な存在形態との関連に自覚的であった経済活動家ブルーストがいる。それにスワンの職業は、株式仲買人であり、価値の上下動を追跡し、動きの先取りに乗じるのが彼の仕事であった。ブルーストの熱心さが本物であると思えるのに対して、ブルデューは、ゲーム感覚ないし投資感覚が必要になる現代を、進路が多様化し錯綜していることにありとし、みんなが「競争の論理、万人の万人に対する戦いの論理」にもとづく、彼らの戦略累積効果にはかならないところのメカニズムの無力な犠牲者だ」とする。

(ブルデュー、前掲書、97頁)。投資とは「死」に結びつけて考えることのできるものであろうが、最初の世界大戦下での執筆という状況で、「状況内にある存在」の全体を託す熱気を、ブルーストは日々必要としたのだろうか。

- 49) 野内、前掲書、214頁。また、「一般化がある程度をこえると、特殊化の様相を帯び、隠語的卑猥性をおびる。それには例えば、後ろめたさを分有する仲間語があり、そしてそこから、独話にいたると考えられる。(217頁)」

50) 野内、前掲書、214-7頁。

- 51) 本稿に先立つ『失われた』<発話>を見いだす(そのI)は、以下のように締め括られた。「自らのあり方の解釈を他者にゆだねることも、観念的な把握によって他者の生命力を奪うことも、これらは私たちに『循環』というイメージを与える。その『循環』は、『物語』を生み出さずにはおかない。」114頁。

- 52) erreurs charmantesの訳語には、迷いが付きまとう。(心惹かれる、魅力ある、愛すべき)(過失、失敗)を組み合わせることになるが、いずれにせよそこには、意味の反転する契機があるといえる。またそこでは、ブルーストの言う「複数の moi」を加味して考えなければならない。それは、「習慣や社会において、またその悪徳において moi をさらすわれわれ」と「書物を生み出す moi」である。後者は、「われわれ自身の奥底で、われわれのうちに再創造することで到達できる自我 moi」である(M. Proust, *Contre Sainte-Beuve*, Bibliothèque de la Pléiade, 1971, pp. 221-2)。以下に引用するブルーストの手紙の一節は、過失と真実の呼称の一体性を示唆する。「私はそれで、過失の色々を、それらを過失だと捉えていると言わなければならないとは思えないで、描かざるをえませんでした。読者がそれらを、私が真実だとしていると思うのなら仕様がありません」。Proust, *Correspondances*, Plon, t.XIII,

pp. 99-100.

スワンと語り手の相似の指摘がある。「スワンはマルセル(語り手)の裏打ちであり、contre-épreuve(逆証:結果から逆にたどって、ある事実の正しさを検証すること)であり、救いを持たないマルセルである。」(Claude-Edmonde Magny, *Histoire du roman français depuis 1918*, Seuil, 1950, p.172. erreur charmante と名付けたこと、そしてその過程を見る眼を持つゆえに、語り手はスワンとは異なる位置にいる。

また、beaux livres における contre-sens という理解も、erreurs charmantes につながる。「美しい書物は一種の外国語で書かれている。それぞれの語に、各人は自分の考える意味や、すくなくとも一つのイメージをあてる。それらは contre-sens (誤った解釈・間違い)であることがたびたびだ。しかし、美しい本にたいして人がおかす contre-sens は美しい。」*Contre Sainte-Beuve*, Gallimard, 1971, p. 305.

- 53) 伊藤邦武『新・哲学講義 哲学に何ができるか』岩波書店、1999年、67-8頁。積極性と制御が一体となる動きは、「嫉妬する者」にも見られる。Le seul péché qui ne fait pas plaisir「快樂をもたらさない唯一の罪」は、Huguette de Broqueville の「嫉妬論」のタイトル(in *La jalousie*, L'Harmattan, 1996, pp. 177-192)であるが、嫉妬には、循環が仕組まれている。
- 54) ラ・ロシュフコー『箴言集』岩波文庫、1989年、19頁。
- 55) ギュスドルフ、前掲書、11頁。
- 56) ここでの créance でも、注39) でとりあげた terinaison と同様の用い方がされている。
- 57) 『失われた時を求めて』の原題、A la recherche du temps perdu では、名詞 recherche 探求が用いられている。
- 58) 前掲書、144頁。
- 59) Roland Barthes, *Leçon*, Editions du Seuil, 1978, p. 46.

本稿は、神戸女学院大学研究所の2000年度研究助成による成果である。

(原稿受理2001年4月24日)